

## 2.調査報告：雑誌記事にみる〈結婚観〉の変遷

石井 研士（國學院大學）

調査対象：大宅壮一文庫所蔵の雑誌（約1万種類，77万冊／2016年4月現在）より  
大宅壮一文庫分類 19【おんな】006 [結婚一般] -001 結婚一般，および  
007 [結婚前後] -008 条件，に分類された記事

調査方法：結婚に対する憧れや忌避、結婚に求められる条件など、〈結婚観〉の変遷を  
調査対象とした雑誌記事によって分析

対象期間：1950 - 1995 年

〈補足〉

\*19 - 006 - 001（結婚一般）に分類された記事 [別添：大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録を参照] に目を通し、表1 [別添：コピー入手記事一覧 (Excel)] の記事を手に入れた。

\*19 - 007 - 008（条件）に分類された記事 [別添：大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録を参照] に目を通し、表2 [別添：コピー入手記事一覧 (Excel)] の記事を手に入れた。  
⇒分析対象は表1・表2の記事であるが、分析においては昨年度入手した記事（007-012 挙式前の準備，-013 結婚費用，-019 結婚式，-020 結婚式場）も参考とした。  
⇒調査対象において、1945 - 49年は記事が僅少であることから、分析は1950年を起点とした。

### 【概要 abstract】

戦後、日本人の結婚／結婚式は大きく変わった。戦前の制度では、男30歳女25歳まで（平均婚姻年齢を超えるまで）は家長の同意なしには結婚できなかったが、戦後の新たな民法では、成人男女の同意によって結婚できるようになり、結婚は、「家」を結ぶものから「個人」の結びつきへと、その表象を変化させていく――

**1950年代前半（昭和25 - 29）**：多くの戦争未亡人の存在が社会問題化するなかで、「貞女二夫に見えず」といった観念は後退し、『未亡人も、他の女性と同じに結婚してもいいのだ。処女の価値は貴んでいいけれども、それが結婚の絶対条件ではない』という思想があらゆる方面から鼓吹された」（平林たい子「この頃の結婚」『婦人公論』1950年10月号）。結婚をとりまく変化には、懸念や戸惑いも示されたが、とりわけ注目されたのは、明るく、快活になった花嫁の姿だった。「ろくろく本人の顔を知らぬまま仲人まかせの結婚も多かった」戦前とは違って、「戦後は見合結婚でも、本人がイヤといえば両親とてもムリ押しは効かない。交際期間も次第に長くなってきているから、挙式当日もお互いに一口も口をきかず、披露宴で花嫁さんがうつむいたきり箸一つつけぬというような風景も珍しくなった」  
「披露宴でニコニコ笑いながらお料理を口にする花嫁さんがむしろ多いのである」（戦後

版結婚行進曲』『週刊朝日』1952年10月26日号)。こうした傾向に、年配者は「アプレ花嫁」と苦い顔をしたが、「エチケットがなくなったというより、エチケットの基準が変わってきているのである」(前同)と評された。

**1950年代後半(昭和30-34)**：厨川白村が『近代の恋愛観』において、「恋愛は悠久永遠の生命の力がこもる」との恋愛至上主義とともに、恋愛を一過性の情熱に終わらせず永続化する努力こそが尊いと主張し、若者の共感を呼んだのは1921年(大正10)のこと。恋愛が持久されることによって「神聖愛」へ高まることを理想とした厨川は、これまで切り離されて考えられていた結婚と恋愛を結合させることを重視した。恋愛を基盤とした結婚こそが結婚のあるべき姿という考え方は、その後徐々に一般化して、1920-30年代の婦人雑誌においてもさまざまな形で表明されていた。しかし、昭和30年代に入って、〈恋愛と結婚は別もの〉という考え方が一般化する。

「この頃の若い女性は、結婚は運命として、いずれ受けとらなければならないものだと考えていながら、結婚に対する不信をもちだしたようです。昔は、結婚を、美しく、センチメンタルに描いていたのですが、そうした夢は現実の絶望的な生活環境の中で、古くさいものになってしまい、結婚生活の重荷や、わずらわしさが鼻につくようになってきました」「だからその時がくるまで、女の若さ女の自由を楽しみたい、それを楽しまなければ損だ」という心理が働いています(石垣綾子「新しい結婚の価値」『若い女性』1956年4月号)。

この頃、さまざまな「結婚論」がさかんに提唱されるが、その社会的背景には「結婚難」が指摘された。結婚適齢期の男女の人口のアンバランスは依然として解消されておらず、その意味で女性にとって結婚難であったが、女性が夫を選ぶ条件はシビアになり、男性にとっても結婚は難しくなってきたのである。「むかしの教育とちがって、いまは一对一の人間関係で教育され、しかも平等の人格を獲得した現在の女性が、自分たちの結婚を、やはり妻も独立した人格としてながめるようになったことは、当然」であり、「むかしなら[男性は]妻をもらえばよかった。しかし現在では、妻になることを女性がきびしく批判していますから、それだけに、男女とも結婚が容易にできない状態」(「結婚は変ってゆく」『週刊女性』1958年5月18日号)が観察された。敗戦は生活や思想の急激な変化をもたらし、古い価値観は権威を失った——「結婚生活を、家長のため、家のため、親のために犠牲にし、その重点を“つとめ”におく考え方は弱くなり、結婚生活それ自体を一つの目的と考え、“結婚の幸福”を重視する態度が強くなった」(「男性過剰時代 女の求める男の条件」『週刊大衆』1958年9月15日号)といった見方がなされた。

“幸福な結婚生活”を実現するためには、なにより結婚相手に「将来有望な青年」を選ばなければならない——「将来有望な青年」との出会いを求め、若い女性が就職の希望条件に「月給の額など問題ではない。それより、都心で、いい会社で、若い有望な男性の多いところがいい」と言い出したのもこの頃である。

**1960年代前半(昭和35-39)**：この時期、結婚を起点とした女性の人生設計モデル(以下、「23歳コース」と略記)が形成・成立する。女性23歳で28歳の男性(理想は身長170

cm、63 kg。職業は技師で月給 2 万 5000 円) と結婚。2 人で新婚生活を楽しみ、25 歳で第一子、28 歳で第二子を出産。すると定年退職時(夫 55 歳・妻 50 歳)には、子どもたち(第一子 25 歳、第二子 22 歳)が一人立ちしてお金がかからなくなり、退職金で老後を楽しむ——この「23 歳コース」は、女性にとって“幸福な結婚生活”のモデルであると同時に、「結婚適齢期」を強く意識させる回路となったと考えられる。

**1960 年代後半(昭和 40 - 44) :** 戦後ベビーブーム(昭和 22 - 24)に生まれた女性が 20 歳前後となる。1960 年代前半における初婚の平均年齢は、男性 27.3 歳、女性 24.5 歳で、その年齢差はほぼ 3 歳。女性の理想は、男性が 4~5 歳年上である。この初婚年齢と男女の年齢差を前提とすると、ベビーブーマー(団塊の世代)の男女はその人口から、ともに相手をさがすのに苦労することは必然である。

**1970 年代前半(昭和 45 - 49) :** 「23 歳コース」(4~5 歳年上の男性)の理想が保持される一方、適齢期の女性(団塊の世代)で同年代(1~2 歳違い)の結婚が見直される。新たな結婚の理想像として、頼れる年上の男性ではなく、友だちの延長のような関係を保つ結婚が語られる。

**1970 年代後半(昭和 50 - 54) :** 「自立する女」「結婚しない女」が注目されるが、全体としては頼れる男性との結婚を望む女性が多い。「自立できれば、あえて結婚しなくてもいい」との考えを示すのは、25~39 歳の女性の 25%。この時期、女性誌は「女にとって結婚とは何か?」「結婚適齢期とは何か?」等、結婚そのものを問うテーマを打ち出している。結婚したいという女性でも、結婚への憧れより、一人で生きていく不安や結婚しないと生きにくいといった消極的理由を語る傾向が認められる。

**1980 年代前半(昭和 55 - 59) :** 結婚を望まない未婚女性が増加傾向を示す一方、結婚に積極的な女性たちにエリート/ブランド志向が指摘される。

「ひところ、翔んでる女といわれ結婚しないことが新しい女という時代があったが、翔べずにバタついて、失速した女もいた。自立したいと思っても、キャリアウーマンにもなれない。そんなところから結婚への回帰が出てきたが、それは昔のような待つ姿勢には戻らず、積極的に働きかける女性になったんです」(京都女子大・小田義彦教授)

**1980 年代後半(昭和 60 - 64) :** 「非婚時代」という言葉が話題となり、結婚は“選択の時代”に入ったといわれる。結婚相手の条件は「3 高」。男性の結婚難と女性の晩婚化が進み、「23 歳コース」規範が消失する。

**1990 年代前半(平成 2-6) :** バブル崩壊…「3 高」神話が崩れ、皇太子・雅子妃の結婚もあり、結婚したい女性が増えている——と結婚ラッシュが期待されるも、未婚者人口は年々増加。女性の平均初婚年齢も上がった。男女とも、結婚に望むのは“パートナーシップ”で、従来の夫・妻の関係や役割を否定する傾向があり、結婚形態の多様化が指摘される。

## 【先行研究】木村涼子『〈主婦〉の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代—』吉川弘文館 2010

「男は仕事、女は家庭」といった性分業および性分業にもとづいた家族のありかたは、現在ゆらぎつつあるといわれるが、いまだ現代社会における「標準」としての位置をゆずりわたしてはいない。高度経済成長期を経て「主婦」以外の選択肢が広がる一方で、「本来ならば女性は主婦に」と考える社会風潮は根強い。[木村 2010 : 3]

木村は、単に現在構築されているジェンダー秩序が近代の産物であることを指摘するにとどまらず、ジェンダー秩序が機能する仕組みを大衆社会の到来という文脈から解き明かそうとする。既存の合意を反映するものではなく、合意を形成するものとしてマスメディアを捉え、「主婦」「良人」「家庭」などに関するイメージや価値観が形成され、人口に膾炙していくプロセスにおいて、マスメディア——具体的には、1920年代に大衆化した商業婦人雑誌（『主婦之友』『婦人公論』『婦人倶楽部』など）——がいかに機能したかを明らかにするのである。

以下、『〈主婦〉の誕生』（Ⅲ - 第 1 章 「主婦」と「良人」の甘い生活）によって、戦前の商業婦人雑誌から析出された〈結婚観〉を要約する。

### ■恋愛を基盤とした結婚こそが結婚のあるべき姿

『婦人公論』などと比較すると保守的であった『主婦之友』においてさえ、恋愛に基づく結婚を肯定的に扱う論調はめずらしくない。恋愛結婚をのぞましいとする議論は、結婚特集などでは必ず展開されている。自由恋愛は危険としても、親や親せきなどしかるべき人物の紹介や監督下で、互いの人格を理解したうえで伴侶を選択することは、のぞましい結婚の在り方として考えられていた。

厨川白村が『近代の恋愛観』において、「恋愛は悠久永遠の生命の力がこもる」との恋愛至上主義とともに、恋愛を一過性の情熱に終わらせず永続化する努力こそが尊いと主張し、若者の共感と呼んだのは 1921 年（大正 10）のことである。恋愛が持久されることによって「神聖愛」へ高まることを理想とした厨川は、これまで切り離されて考えられていた結婚と恋愛を結合させることを重視した。恋愛を基盤とした結婚こそが結婚のあるべき姿という考え方は、その後徐々に一般化して、1920 - 30 年代の婦人雑誌においてもさまざまに形で表明されていた。

### ■理想の夫婦は「対等な関係」

当時の婦人雑誌では、当事者同士の好意がそだつ基盤をととのえるために、互いを知り合う婚約期間や男女の健全な交際機会の必要性が説かれた。また、両親の「言いなり」になるのではなく女性が自ら相手を見定めること、経済力・外見・家柄だけでなく人柄で選ぶことが、幸福な家庭を築くための知恵とされた。

恋愛感情や本人の意思を尊重し人物本位で結ばれた結婚は、妻の人格をみとめる家庭をつくることにつながっていく。夫が独断的に支配するのではなく、対等なパートナーとして妻が尊重される家庭、妻が夫を一方向的に敬うのではなく、夫も妻に対して敬愛と信頼をささげる家庭が、「これからの家庭」の姿である。互いの人格を敬愛するなかで、共通の趣味を楽しみ、なごやかな団欒が実現される。「主婦」は、良人という「主人」に仕える家僕ではなく、「主人」と相並ぶ「女主人」を意味する——それが、当時の婦人雑誌の世界で提示される理想であった。

### ■男性が求める“理想の妻”

「家庭が楽園であり、家族の避難所であるからには、その支配者たる主婦はとりもなおさず、楽園の女王らしくあらねばなりません」「良人をはじめ家族のものを柔らかい心情（ハート）のうちに包み込んで、『一步でも私の家庭に足を入れたものには、不安も与えねば不快も与えず、それこそほんとうの楽園の人にせずにはおかぬ』といふ意気をもって、主婦たる役目をはたして貰いたい」（「結婚前の青年が望む理想の細君」『主婦之友』大正7年10月号）

「伸伸とした、明るい、快活な女、それはたしかに、家庭の空気を明快にする女神です」（「再婚男子の求むる理想の妻」『主婦之友』大正10年11月号）

家庭は、まず何よりも夫にとっての「楽園」でなければならない。『主婦之友』では、夫がくつろげる楽しい「家庭（ホーム）」をつくることの重要性に言及する評論記事は、年平均で5.7本登場する。

### ■婦人雑誌の一大テーマ「永久に良人に愛される妻」

「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業に則って主婦に期待される「内助の功」とは、家事・育児をきちんとこなすとともに、仕事から疲れて帰ってくる良人を癒し、彼の職業生活を情緒的にもサポートすることである。しかし、妻として期待されることは、性別分業の遂行だけではない。婦人雑誌が描く理想の家庭は、恋愛を基礎とした夫婦家族である。よって、「幸福」な家庭運営のためには、良人に「愛されつづける」ことが重要となる。恋愛感情にもとづく結婚生活が理想として語られても、それを現実の生活において実現し、維持していくことはたやすいことではない。1920 - 30年代の婦人雑誌には、結婚生活の充実のためには恋愛・性愛関係を維持することこそが重要であるという観点が導入されている。

早稲田大学教授中桐確太郎は、「いつも良人の恋人たれ」とのタイトルで、結婚生活と恋愛生活を分けて考えることが、結婚生活の不幸を招くと論じる（「新夫婦和合の秘訣六ヵ条」『主婦之友』昭和4年4月号）。婦人雑誌は「良人に愛される妻」にならねばならないと説く。「永久に良人に愛される妻」とはいかなる妻なのか、婦人雑誌の一大テーマである。

妻として良人の愛を獲得しつづけるための工夫や知恵は、評論記事、座談会・インタビ

ユー記事、実用記事と、あらゆる形態の記事をつうじて「啓蒙」されている。それらの記事で述べられる「良人に愛される妻」の要件は――

- ①女性としての美しさを忘れてはならない
- ②性生活上の良きパートナーでなければならない
- ③良人に対するケア・サービスの充実

良人は妻から手をかけてもらうことに歓びを感じる。ケアされることで愛されているという実感を得る。近代家族において経済的・対外的な家庭運営の責務を負う良人の意識内では、「家長」として頼られる一方で、日常生活上は完全に依存させてくれる妻に対して愛情を感じる回路が設置されている。「永久に良人から愛される妻」であるためには、妻はその回路を活性化し、作動させつづけなければならない。

- ④教養やウィットをもつこと（良妻賢母は、無知無教養であってはならない）

夫婦間で冗談を言い合うことは、現代ではごく当たり前の光景であるが、当時はわざわざその必要性が言明されるほど、家庭における笑いやユーモアは希少性があった。これからの「愛される妻」は、愉快的な会話やユーモアで良人を楽しませる「お茶目」を發揮することに消極的であってはいけない。それができない場合は、良人は家庭外の享楽に誘い出されてしまう。「機知（ウィット）」に富んだ受け答え、「ユーモア」と笑い――平日の朝夕、休日の余暇時間を、妻との会話や外出で過ごすことが愉快であると思わせることができれば、夫婦間の愛情は維持される。

## ■理想の良人の条件

理想の良人の第一の要件は、女性を尊重することを知っていること。妻を対等なパートナーとして尊重しない、旧弊な男尊女卑的観念をもっている男性は批判される。

たとえば、「奥様をこんな風に頭ごなしに馬鹿呼ばわりして怒鳴り散らす旦那様」（竹内千代子「奥様に大切にされる旦那様の心得」『婦人倶楽部』昭和9年2月号）、「妻を子供扱い」し「第三者の前で妻を叱る」良人（菊池寛「良人読本 良人の悪徳」『主婦之友』昭和13年3月号）、「女には大事を打ち明けない」といった『忠臣蔵』式の「時勢遅れ」の良人（吉岡弥生「私がもし嫁入り前の娘だったらこんな青年と結婚したい」『主婦之友』昭和10年2月号）、「お給金の要らない女中でも雇っているような気になって、良人の気ままで、妻を追い使」う良人（「旦那様のしつけ方発表座談会」『主婦之友』昭和8年1月号）などは、「悪い良人」である。

家事育児が主婦の役割とはいえ、家庭にしばりつけるようなことはせず、時には気晴らしになる外出も許してくれるような包容力のある良人、主婦の仕事を自分の仕事と同じく重要で尊いものとして理解し評価する良人が、「理想の良人の条件」である。

第二の要件は、妻と親しみ、妻を幸福にすること（妻へのサービス）の重要性を理解していること。そして、妻と親しもうとする良人は、妻に対して純愛を貫く良人である。理想の良人の第三の要件は、結婚後も妻に純愛を捧げる貞節を守ることである。

1920 - 30年代の『主婦之友』では、「女性と同じく男性も結婚まで純潔を守るべきだ」という価値観や「女性と同じく男性も結婚後貞節を守るべき」とする価値観が、女性にのみ純潔や貞操を求める価値観よ

りも誌面に多く提示されている。

## 【1950 - 1954】(昭和 25 - 29)

### 女性たちの心情革命 明るくなった花嫁

- ◆戦前（封建的な家族制度）と戦後（新民法の個人主義）との交錯
- ◆結婚式で快活に振舞う花嫁の姿が（戦後の変化）として注目される
- ◆「恋愛結婚と見合い結婚の中間をゆく『交際結婚』」が望ましいといわれる

#### 記事抜粋：平林たい子「この頃の結婚」『婦人公論』1950年10月号

（略）戦争未亡人の傷口は生々しい。本来ならば未亡人となるべき年齢でない若い年齢で未亡人となっているためもあるだろう。

ある未亡人の場合だが、二畳の廊下をかりてくらしている若い人が私に言った。

「ちゃんとした室に住まわしてくれる人となら、誰とでも結婚していいわ。誰か世話して一。お願い」

この人には、自分の身分に対する何かの甘えがある。

も一つこれはある人からきいた話。米の配給所で某夫人と逢ったとき

「御主人がずっと旅行だそうで、お淋しいでしょう」

といったとき、「いいえ、せいせいしているわ」とその「せいせい」にふしぎな力を入れて言った。その夫婦は新婚で、男の年が多すぎるとは思っていた。ところが、また別な人が配給所でその婦人と一緒になったとき、

「年や体格からあの人寿命はもう二三年位のものだろうと思って来たのよ。所がどうして、どうして、今ん所じゃ私の方がさきに死にそうだわ。もう五六年もこんな無給の奉公をしなくちゃ財産が貰えないなら、考えなくちゃならないわ」

この人も、自分の戦争未亡人という資格を妙な権利に変えてしまっているようだ。が、それともかくとしてこういう種類の功利思想は、必ずしも目新しいものではないかも知れない。しかしこういう思想を堂々と米の配給所前の群衆の中で披露できることになったのについては、社会のある一つの壁の倒壊がまざまざと思われる。「貞女二夫に見えず」という思想を日本人はずい分長く守って来た。が、「戦争未亡人問題」が一つの社会問題として提出されてから、「未亡人も、他の女性と同じに結婚してもいいのだ。処女の価値は貴んでいいけれども、それが結婚の絶対条件ではない」という思想があらゆる方面から鼓吹された。それは功利的な出発点からとはいえひとまず合理的な考え方ではある。

ところが、一たん貞操とはそのようなものか、と知ったある女性たちの心情革命は、二夫に見えずという掟を二夫に見えてもよいのだ、と訂正するだけの所では停めて置けない。「二夫に見えず」という思想がまちがっていたということになると、昔からつみ上げて来た結婚についての、あらゆるモラルはみんなまちがっていたということにしなければ気がすまないのではないだろうか。

或は、前に記した某夫人も、口でいうほど肚の中では打算で夫に向かっているのではな

いかも知れない。が、これが偽装だったとしても、こういう偽装をさせる雰囲気は公然と世の中に存在するということがやはり問題である。

特殊な未亡人に限らず、処女というものが結婚の絶対条件でなくなった所から出発して、処女まですぐすててもよいという観念にはしろろとする職業婦人などの存在はもう格別目新しくはない。が、比較的深窓に育ったいわゆる良家の娘が、婚約者と不可解な交際をはじめている。親もまたさせているのが目につく。

「あの家では、式をあげないうちに赤ん坊が生れるから見ていてごらんなさい」と、ある人が、ある家のことを言った。

そういえば、許婚者の姿がいつも見え、泊まって行くこともあるようである。結婚前の交際がこの家ではずい分重大な意味になっているらしい。二人は自由に出歩いてもいる。

当人同志の感情はわかるとして親がどうして、こんなことをさせるのか、私にはわからなかった。

「男が少ないから、ああやって、許婚者を確保しておくんじゃないかしら」

ある人は、その人らしい憶測をする。たしかに、こう結婚難では許婚不安ということもあろう。この娘のような良家のことではないが、やや似た経験を経た新郎新婦の晴れの式に私はついぞや出席した。お嫁さんが振袖のまま、よく酒をのむお髻さんの背中をたたいて、「貴方そんなに召上っちゃだめよ」などとなれなれしく言っているのには、思わず笑いがこみ上げた。

#### **記事抜粋：「戦後版結婚行進曲」『週刊朝日』1952年10月26日号**

(略) 式場が混雑したために〇〇家と△△家が二組あって、互いに花嫁さんと花婿さんを取りちがえてしまったというウソのような実話がある。

もちろん、これは戦前のことで、むかしは見合いといっても、当人同士はほんの一度きり、両親さえ相手の家の系図とか財産は綿密に調べるが、ろくろく本人の顔を知らぬ仲人まかせの結婚も多かったので、こんな間違いもあったのだろう。

戦後は見合結婚でも、本人がイヤといえど両親とてもムリ押しは効かない。交際期間も次第に長くなってきているから、挙式当日もお互いに一口も口をきかず、披露宴で花嫁さんがうつむいたきり箸一つつけぬというような風景も珍しくなった。では、どのように変わってきているか？

戦後のお嬢さんはなかなか勇敢である。たった一人で式場へ挙式の申し込みにくるのがいる。かと思えば二人きりでやってきて、あちこち式場や披露宴の部屋を見廻り、案内役の方が顔まけするというものもある。

もっとハッキリしている例。挙式、披露宴の申込みに両親がきて、御引物まで昔通りに注文して行ったのを、翌くる日、新郎新婦となるべき二人がきて、

「おみやげなんかムダだから、そんなのは止めにしたい。そのお金は新婚旅行の方へ廻したい」



これには、二十年来、この商売をやってきたオヤジさんも驚いたが、またこのごろの若い人たちはハッキリしてえらいと感心したそうである。同じように衣装を借りる場合も、両親が決めていったあとから、二人が現われて、簡素な衣装に変えていった話もある。

むかしは廊下を歩くお嫁さんが、下ばかり向いているので、間違えてヨソの座敷へ入ってしまったという悲喜劇もあったが、近頃のお嫁さんで、そんなにアがっているのはまずあるまい。中には、「お二人で嬉々として談笑しながら、堂々と歩いてゆく方がある」そうだから。

場所によっては控室に新婦のために食事を用意する式場もあるが、いまではそんな心配も必要なさそう。披露宴でニコニコ笑いながらお料理を口にする花嫁さんがむしろ多いのである。中には招待されたお客様より先に御馳走の手をつける新婦さん。

「もっと御飲物持ってきて頂戴」

とみずから食卓のサイハイを振る花嫁さん。お客さんの間へ入って行ってお酌をしまわりのもある。新郎の方がかえって固くなってしまう。まさに婦権伸長時代だ。

むかしは「花嫁さんが緊張のあまり怒ったように撮れるのが多かった」と記念撮影の写真屋さんという。このごろはチャンと自分でニコリして表情をつくる（映画の影響もあるらしい）しなかには「あなた、おズボンのシワがのびてないわ」と新郎の世話までやく花嫁さんが存外多い。写真屋さんが服装を直そうとすると

「あたしがやるから……」

と手を触れさせない。おかげで花婿さんのネクタイの柄がよく写らなかつたりする。背の高い花嫁さんは気を利かして、草履なり、靴を脱いで、御主人より背を低くかまえて、

「サア、写して下さい」

というもあるそう。

年配の人たちはこうした傾向をアプレ花嫁と苦い顔をする。そのなかには、たしかにあまり責めぬわけにはゆかぬ例もあるが、おしなべて戦後の花嫁さんには明るさが加わった現れでもあろう。エチケツトがなくなったというより、エチケツトの基準が変わってきているのである。

(中略)

交際のしかたについてだが、恋愛結婚と見合結婚の中間をゆく「交際結婚」は生理学上からも望ましい行き方だ。大脳の働き方を研究する条件反射の上で、汎化と分化という現象がある。ある種の音を聞かせて食物を与える習慣をつけた犬は初めのうちはどんな音を聞いてもきつと唾液を出すようになる。それが汎化で、人間で言えば一つが気に入れば何でも気に入ってしまう場合だ。この時期が過ぎると分化になって、犬は一定の音に対してだけ条件反射して唾液を出し、人間にはいい所はいい悪い所は悪いと判断できるようになる。見合結婚は汎化さえ起こすゆとりがなく、恋愛結婚は汎化が多い。——交際結婚は、初め汎化、後に分化となり、覚悟をきめた上で結婚するだけの時間の余裕を持つわけだから。

## 【1955 - 1959】(昭和 30 - 34)

### 恋愛と結婚は別もの 結婚はあくまで理性で計算する選択

- ◆「戦後におこった社会のユガミや障害など、あるいは男女がおかれている理実的な環境などが、最近の若い人たちの恋愛と結婚の分裂をおこさせている」(南博・談)
- ◆「結婚論」の流行 さまざまな結婚形式が提唱される
- ◆『結婚難時代』…戦争に起因する女性の結婚難は続くも、男性に求められる結婚の条件はシビアに……“愛情より生活力”
- ◆卒業→就職→職場結婚 が“ゴールイン・コース”に

#### 記事抜粋：石垣綾子「新しい結婚の価値」『若い女性』1956年4月号

この頃の若い女性は、結婚は運命として、いずれ受けとらなければならないものだと考えていながら、結婚に対する不信をもちだしたようです。昔は、結婚を、美しく、センチメンタルに描いていたのですが、そうした夢は現実の絶望的な生活環境の中で、古くさいものになってしまい、結婚生活の重荷や、わずらわしさが鼻につくようになってきました。若い世代は、現実をみつめる眼をもちだした、それが一つの原因になっています。映画「早春」をみても、結婚生活の倦怠が描き出されていますが、私達の周囲にも、そのようなケースがかなりあります。(中略)

それなら、結婚はごめんだ、という強い態度をとるかという、そうではなく、いずれは結婚するのだという、あきらめの気持を心の一部にもっています。だからその時がくるまで、女の若さ女の自由を楽しみたい、それを楽しまなければ損だという心理が強く働いています。(中略)

男女関係が、社会の因習にしばられている日本の現在で、恋愛から結婚へという過程は育ちにくいのです。そこから若い人達の中に、結婚とは別ものだという考え方が芽生えてきます。若い人達が結婚にあきらめをつけ、恋愛の一時的な燃え上がりに身を託すのは、悲しい日本的な条件の中で生れた姿でしょう。(中略) ほとぼしり出る力となり、生命の泉となる恋愛の激しさを知らずに、若い人達が、手軽な恋愛に満足し、手軽な結婚に身をゆだねていくことを、私は本当に悲しいと思います。

#### 記事抜粋：「結婚は変ってゆく」『週刊女性』1958年5月18日号

作家の平林たい子さんが司会で、未婚女性を囲んだ「恋愛と結婚」というテーマのある座談会があったとき、平林さんが、「あなたがたは、結婚前の恋愛だったら、相手からだと許していいと思いますか」と質問したのに対し、明快な口調で、

「悔いのない相手だったら許してもいいと思います。だけど許したからといって、そのことで相手に拘束されることは不賛成です。だって恋愛と結婚は別ですもの」

「私も同感だわ。恋愛には激しい感情がともないますが、結婚には条件が必要ですし、も

し夫としての条件に合った人なら、気持ちよく許していいと思います」

「たとえ許しても、もし結婚の条件にあてはまらぬ人だったら、私はいさぎよく別れてしまおうわ」

すると、これらの意見をきいて平林さんは

「私たちの若いころは、結婚をそんなふうに、唯物的には考えませんでした」と、しばらく絶句してしまったそうです。

エレン＝ケイは、「恋愛がともなわない結婚は、結婚がともなわない恋愛よりも不道德である」といっていますが、この恋愛至上主義にくらべると、これらの意見は、なんとドライで直情的な考え方でしょうか。このように恋愛は情熱からうまれた衝動的なものであるが、結婚はあくまで理性で計算する選択であるという、恋愛と結婚の分離感は、いかにも現在の女性らしい結婚観が、あざやかに浮かび出しているようです。

社会心理研究所の南博氏は「戦後におこった社会のユガミや障害など、あるいは男女がおかれている理実的な環境などが、最近の若い人たちの恋愛と結婚の分裂をおこさせている」

(中略)

昨年来さかんに提唱されたのが、有名人の「結婚論」です。(以下、要約)

#### ○「第二結婚論」(神奈川大教授で評論家の大熊信行氏が提唱)

子どもを産んで育てる目的をもった従来の結婚形式(第一結婚)に対して、子どもを産まないことを前提とする自由な性関係に立った新しい形式(第二結婚)が許されるべきと主張。社会の道徳からしめ出されている夫婦以外の男女の愛の結合に、新しい市民権をあたえて、結婚制度を拡張したほうが現在の社会にマッチしている、という主旨。

#### ○「強妻結婚論」(評論家の大宅壮一氏が提唱)

社会的な地位や経済的自活能力があつて、普通の男性よりも社会的にすぐれた女性は、そのことが、かえって大きなマイナスとなつて、その人たちの結婚あるいは再婚にブレーキをかけている場合が多い。といて、このような人たちが、自分と同等の相手をさがすとなれば、きわめて困難なことである。だいたい、性を棄権しなければ女性が自立できない、というのでは、ほんとうの女性解放とはいえない。戦後の社会では、こうした地位や自活力のあるすばらしい女性が増加してきており、この人たちは、すべからく年下の男性に向かつて、新しいチャンスをつかむべきである、という主旨。

#### ○「近接結婚論」(ラジオ・ドクターを務めた石垣純二氏)

「…結婚における理想的な条件は、男女が肉体的にも精神的にも同じ程度に発達していることが望ましい。女性の平均寿命は男性よりも二歳ほど長い。その意味から、妻は二歳年上であるか、それに近い年齢であることが、夫婦の調和の上で理想的といえる」

#### ○「人生二回結婚論」(医博で探偵作家の林麟氏)

「…まず 20 歳前後の若い男性が、40 歳前後の中年の女性と結婚する。この夫婦が 20 年

たって、つまり男性が 40 歳になると、60 歳になった妻を離婚する。そうして、40 歳の男性は 20 歳前後の若い妻を迎える。また 20 年たって男性が 60 歳になると、40 歳になった妻と離婚する。こうした形をくり返してゆけば、いちじるしい結婚難、ことに 30 歳以上の独身女性の結婚難は解消するし、男女の性本能も理想的に合理化されるし、売春とか不倫の問題も解決がつく。またお互いの精神生活の成長のうえでも、これは大いに役立つ」

(以上、このような結婚論が流行するのも「結婚難」という社会背景があればこそ)

(略) 新宿生活館長の塚本哲氏の話でも、「女性の意識が向上したせいかわを選ぶ場合、たとえ現在の収入が高額であっても、将来の収入源に不安があるかぎり、絶対に結婚の条件と認めません。

いまでも、よく男性のほうから、うちの家系はどうだとか、学歴がどうだとかいって、足もとのことよりも自分のミエをみせびらかす人がいますが、最近の女性は、そんなものにごまかされません。進歩しましたね。私は、いまのような時代に昔の考え方をする人のことを『結婚斜陽族』とよんでいます、斜陽族には男性が多いようです」と実情を語っています。

こうした、一見して冷たすぎるほどの理性を、いまの女性はなぜ抱くのでしょうか。それをきびしく示しているのが、労働省調査の生活統計です。

現在の社会生活では、結婚適齢期である 27 歳の男子の平均収入が 1 万 4, ~5000 円。4 人家族の世帯経費が 2 万 8000 円で、頭割りにするとひとり 7000 円ですから、新婚家庭では、その割合でゆくと最低 1 万 5000 円ないと窮屈なことになります。ところが、これだけでは現在の結婚生活はギリギリの線で、したがって昔のように「手ナベさげても」という愛情の決意をもった女性がいなかぎり、結婚は実際問題として不可能になってくるわけです。

しかも、むかしの教育とちがって、いまは一对一の人間関係で教育され、しかも平等の人格を獲得した現在の女性が、自分たちの結婚を、やはり妻も独立した人格としてながめるようになったことは、当然のことといえます。

塚本氏は「女性も結婚難の時代ですが、男性の結婚難のほうが深刻です。なぜかという  
と、むかしなら妻をもらえばよかった。しかし現在では、妻になることを女性がきびしく  
批判していますから、それだけに、男女とも結婚が容易にできない状態になっています」  
と実情を指摘しています。

#### **記事抜粋：「男性過剰時代 女の求める男の条件」『週刊大衆』1958 年 9 月 15 日号**

(略) 戦後 13 年たった今日でも、いぜんとして統計の上では需要と供給のバランスがとれていない。つまり、男女の数の不均衡は、まだメドがついていないのだ。

そこで女性はいつまでも買い手のあらわれるのを待っているわけにはいかず、結婚相談

所という“公正取引所”を利用したり、パーティという臨時取引所にあらわれて、自分をできるだけいい条件で売りこもうとヤッキーになった。

こうしたダンピング状態が、久しくつづいたせいか、「結婚しようと思えば、花嫁候補は何人でもいる。なにもあせって、できの悪い女房をもらうことはない……」と、うそぶく男性がめっぽうふえたものだ。

ところが、女性側は男側が思うほど甘くはなかった。無条件でよりぬきの美女をめとれると考えるのは、男性の大甘なユメでしかなかったのだ。

結婚の人口比率の上では、たしかに男性 100 人に対して女性が 110 人くらい。その数はおよそ 300 万人も多いのだが、もはや需要供給の机上の理論だけでは、男性の望むようなムシのいい条件は通らなくなったのである。

それは“性の解放”とか“職場への進出”“社会的地位の確立”等が、女性の眼を開かせ、男性の一方的な要求にソッポを向きはじめたからだ。（中略）

——だが、それでも男性は結婚人口の上で、女性のほうが多いことをタテにとって、容易に“男の値打ち”を下げようとせず、横柄な態度をおし通そうとしていたのである。

その鼻先へ、厚生省人口問題研究所の数字が冷然とつきつけられてきたのである。昭和四十数年には、女性が減って逆に男性が増えてくるという。（中略）“男性結婚難”の時代は、静かにもうやってきつつあるのだ。

敗戦は私たちの生活や思想に急激な変化をもたらした。古い価値観はその権威を失った。もちろん、結婚に対する見方も考え方も大幅に変わった。

結婚生活を、家長のため、家のため、親のために犠牲にし、その重点を“つとめ”におく考え方は弱くなり、結婚生活それ自体を一つの目的と考え、“結婚の幸福”を重視する態度が強くなった。

（以下、要約）

#### “幸福な結婚生活”のために女性が求める結婚相手の条件

- (1) 生活力（収入）：月収 1 万 5, ～6000 円～2 万円程度を希望する割合が最も多く、2 万 5000 円～3 万円を希望する割合もグンと増えている。
- (2) 舅・小姑のいない家を望む
- (3) 女子大生の意識調査によると「結婚相手は童貞である方がよい」が最多数
- (4) 身長は五尺二寸以上
- (5) 好まれる職業は、大学教授、ジャーナリスト、官吏、スポーツマン、芸能人、など
- (6) 嫌われる職業は、農山漁村の労働者、地方都市の小商店、中小企業の工員、など  
➡ “万事、キレイごとのサラリーマンの奥さま” への夢があるようだ

記事抜粋：「結婚コースは変る」『週刊女性』1958年9月21日号

いまでは、花嫁学校というのは、あまりはやらないらしい。そのかわり洋裁学校・料理学校、さてはビューティー・スクールといった学校が大流行だ。(中略)

「(しかし) 顔には出さないが、対男性とか結婚に、洋裁学校組は、ほかの人以上に關心をもっているけど、あそこは女護の島でしょ、男性とつき合う機会もないし、また、つき合ったとしても、つき合い方を知らないから、ちょっとのことでもカチカチに堅くなったり、用心深くなったりしてうまくいかないらしいの。それだからといって、親のすすめるお見合いじゃ…といたぐあいらしいわ」

というわけで、花嫁になる条件としての洋裁学校卒業証書は人気落ちてしまった、というのだ。(中略)

いくら時代が変わったからといって、自分の娘が売れ残るのを喜ぶ親はいない。また当人自身もそうだ。

ことし和洋短大を出て、H 船舶に入社した小島俊子さん(23)は、父親が彫刻家で働きに出る必要もなかったが、勤めに出た動機は、

「私はどうしてもよかったのですが、父が、社会の勉強にもなるし、そのうち気にいった男性でも見つかるだろう、と勧めるものだから、ついでここに入社しました」

というわけだったそうだ。

時代もだいぶ変わってきたし、娘を箱入りにしておくだけの経済的余裕もなくなった、それじゃいっそ勤めに出して、そこで婿選びをさせたら——というのが、いまの親の考え方。小島さんなどは、このよい例ではなからうか。どうせ勤めるなら、将来有望な青年のいそような都心の一流会社へ、と親も娘も考えているようだ。(中略)

丸の内・銀座・有楽町と、都心のビジネス・センターを一手にかかえ込んでいる文京・千代田・中央の各区管轄の東京都神田橋女子職安の調べによると、日に600名から800名の女子求職者がここの窓口をおとずれるが、そのうちの92%までが管轄外、また、92%のうちの15%は千葉・埼玉・神奈川といった近県からはるばるやってくる人たちだ。(中略)

洋裁学校が「女のはきだめ」になったり、娘の大学進学をはばむガンコおやじの減ったのも、都心の女子職安がこむのも、卒業—箱入り娘—見合い結婚という結婚コースが全くの旧道となり、いまの娘たちは、卒業—就職—職場結婚という新道を走るようになったからではないだろうか。

若い娘が就職の希望条件に、「月給の額など問題ではない。それより、都心で、いい会社で、若い有望な男性の多いところがいい」と、こんな夢と打算を詰め込んだ言葉を並べるようになったのがなによりの証拠である。

## 【1960 - 1964】(昭和 35 - 39)

### 23 歳で結婚、子どもは 2 人—結婚を起点とした人生設計モデルの成立—

- ◆理想の夫は 28 歳、身長 170 センチ、63 キロ、職業は技師で月給 2 万 5000 円
- ◆理想の人生設計：23 歳で 28 歳の男性と結婚。2 人の新婚生活を楽しみ、25 歳で第一子、28 歳で第二子を出産。定年退職時（夫 55 歳・妻 50 歳）には子どもたちにお金がかからなくなり（第一子 25 歳、第二子 22 歳）、退職金で老後を楽しむ
- ◆マイホームの理想型：皇太子と美智子妃とナルちゃんの家（しあわせなムード）
- ◆2 人だけのスイート・ホームへの憧れ（＝親・兄弟との同居を嫌う傾向が顕著に）
- ◆山の中の小さな教会で結婚式を…ロマンティックな結婚式への憧れ

#### 記事抜粋：「一流ホテルで結婚式を挙げれば」『日本』1962 年 5 月号

耳新しいところで、中村錦之助と有馬稲子が、東急ホテルで、千人もの客を招いて、豪華な結婚披露宴を催したのを筆頭に、久我美子と平田昭彦がつづき、ごくさいきんでは、帝国ホテルで披露宴をした、勝新太郎と中村玉緒、三月末の市川雷蔵、また四月には山本富士子と古屋丈晴氏がホテルニュージャパンで、これまた盛大な結婚披露宴が行なわれるという。

映画スターたちの、結婚披露宴ともなれば、どうしても、五百人から千人近い大披露宴ともなろうし、週刊誌や芸能新聞には、デカデカと、その写真が載せられる。

世はまさに、結婚式ブームだそうだからなのか、または地方の人々にとっては、東京のまん中にある、一流ホテルというようなところで、華やかな結婚披露宴をする、映画スターたちの写真をみて、夢と憧れを満たしているのだろうか。

#### 記事抜粋：「女性が狙う独身男性 1 2 の条件」『日本』1962 年 9 月号

(略)「私の推薦する五人の独身サラリーマン」(若い女性＝講談社)「ハズ候補紹介」(女性自身＝光文社)「職業のナンバーワン独身男性」(マドモアゼル＝小学館)　ここ 2, 3 年お嬢さんむけの雑誌が三誌、そういう欄を掲載してきた。若い独身男性を紹介するページだ。(中略)さて、わたしは三つの雑誌から、それぞれの欄の担当記者にお集まりいただいた。どんな男性に、読者の人気は殺到したか？を聞かせてもらうためである。それによって、いまの若いお嬢さん方の男性観や結婚観をくみとりたかった。いいかえれば、当世の男性優良銘柄とは、最大公約数にまとめると、どういう人物か？　その点をつかむ目的だった。

#### (1) 年齢は 28 歳

どの雑誌も、若い女性が対象。原則としては、登場人物を 30 歳そこそこまでに区切っている。にしても、29、30 となると、平均して反響が少なかった。やはり、未婚女性の

半は、若さに魅力を感じるのだろう。

もちろん、24や25の新進でも、引手は多くなかった。これは、収入がからんでいる。若くて、しかも、食べていける——2つの線の接点が、28か27。

## (2) 顔は問題ではない

美男子だからといって、とくに人気が集まったフシはなかった。眼鏡も関係なし。しかし、どちらかといえば、ノッペリしたニヤケ型の色男は、敬遠されていた。青白きインテリ型も、あまり受けない。

しいてわければ、得票が多いのは、三船敏郎、仲代達矢、石原裕次郎などのタイプ。ジャック・セラー型はダメのようだ。

## (3) 170センチ、63キロ

背の低い男は、ぜったい好かれない。これは、もう規則みたいなものである。ほかの点が、どんなによくても、挽回不可能。といって、高ければ高いほどよろしい——というわけでもなさそう。170から175センチ程度が理想らしい。

肥満型も、ぜんぜんいけない。ヒョロヒョロよりも、もっと悪い。いちばんいいのが、ひきしまった筋肉質、スポーツマン型だ。身長が170センチなら、63キロといったところ。

## (4) 石部金吉はダメ

とくに、“男の貞操”は値打ちがなくなっている。童貞の問題は、「そんなこと」という感じ。むしろ、たくさんの女性にモテる男が歓迎される。

いまのお嬢さん方は、不良っぽさにひかれる傾きが強い。酒もタバコもやらない——なんてのは、かえってマイナスに数えられていた。仕事一途の模範サラリーマンは、存外、不人気だった。ただし、カケゴトだけはいけない。

## (5) 職業は技師

類型的なサラリーマンが、わりにアピールしなかった。安定した票は集めるのだが。あまりわからない。個人としての才能や技術を生かせる職業が、ゴッソリと反響をさらった。建築技師を最高に、マスコミ関係、カメラマン、デザイナー、パイロットなど、自由業の要素が喜ばれている。当世娘気質なのだろう。

サラリーマンでも、外国へいけるチャンスのあるポジションにいる人は、軒なみにえらばれた。例外はなかった。極端すぎるくらい目立つ偏向である。少し、どうかとおもわれる。いく先では、スイスやハワイが、とくに“イカす”らしかった。

サラリーマンでは、会社の格に、きびしい目が光っていた。上場される一流会社の社員は、それだけで、ある程度の信望を得る。第二市場の事業所となると、ガタッと落ちた。若い婦人たちの経済知識は相当なものである。といたいだが、いっぽう、マスコミに広告のきいているメーカーもぜったい、と見えた。やはりPR時代だ。

地方へ転勤する見こみのある職種。これも感心しないらしい。反応に、テキ面に現われている。女ごころは東京万能。



## (6) 月給は二万五千円

この項目で、ヤング・レディーたちは、地道なところを発揮した。けっして莫大な収入を望んではいない。ただし、あまりに安月給では、ふりむかれなかったのは、もちろんだ。「手なべさげても」は、むかしの気風。が、「ともかせぎを希望する」と声明した候補も、月給があつての上なら、OKだった。楽しむためのともかせぎは、望むところらしい。「貯金なし」と発表した男性も、それだけでソッポをむかれた気配はない。ほかの点がよければ、りっぱな得票ぶりである。

サラリーや貯金よりは、職種のほうが大切。はっきりした共通点であつた。「新居は団地」で大部分が合格した。

## (7) 母一人子一人は落第

家族構成への関心が、おもいがけないほどに鋭い。親きょうだいとの同居には、むきだしに「ノー」の答えが出ている。そういう危険のある片親の人、長男、ことに一人息子は、とことんまで毛ぎらいされた。なかでも、母一人子一人は無条件にヒジ鉄だった。

きょうだいの項目についても、きびしく監視の目が注がれた。妹がたくさんいる総領息子などは、サンタンたるもの。あととりとして、将来、面倒を見なくてはならないことへの恐怖なのだろう。

二人だけのスイート・ホームでなくては、おイヤなのである。それに比べれば、名門の出だとか、ブルジョア息子だの、毛並みなぞは軽く無視されている。

## (8) 東大出かならずしも

学歴は、なんといつても、大学卒が喜ばれる。もつとも、「高校卒の人も出してください」という投書も、だいぶきたそうだ。地についての着実派の読者なのだろう。しかし、ご注文に応じてみたら、一般には興味を持たれなかった。そのへんが本心とおもわれる。

出身校別では、両横綱が早稲田と慶応。都会の女性は慶応をとり、地方では早稲田が高く買われた。つづいては、一ツ橋あたり。東大出は、ご本人がうぬぼれているほどには、モテない。

地方の大学を出た人が、魅力を感じられていないのは、やっぱり、東京中心の世相か。

## (9) 甘チャン歓迎

意識してやるのか、どうか？ 自己紹介の欄に、こんなことを書く候補がいる。「下宿の一人住まい。温かいミソ汁にうえている」こういう人は、きまって、ワンサと申しこみを受ける。坊や坊やした男性に、ご婦人はヨワい。母性じみた愛情をおこしてしまうらしい。「せんだっての休暇では、クニに帰って、母といっしょに一泊旅行をした」こんなのも、大いによろしい。甘ったれみたいところが刺激するのだろう。

東大の出身者が、意外に不評なもの、そんな感じがないからかもしれない。

が、ここには、もうひとつ、見落とせない裏がある。「下宿」「クニの母」…これらのことばのかげには、「親といっしょに住まなくてもいい」という境遇が語られている。女ごころは、敏感にそれをキャッチしているはずだ。知恵というものである。

## (10) スポーツが不可欠

学生時代、選手をやっていた。そうあれば、これはもう上位当選は疑いなし。少なくとも、趣味の欄に、なにかスポーツが記入されていないようでは、アピールはムリ。スポーツ時代である。

健康という実質ではあるまい。スマートさ、朗らかさが要求されている。風潮だ。

## (11) 精神と近代感覚

ワッとばかり、読者から手紙が来襲した。ほかに、理由は考えられない。どうしても、つぎの一行のせいにならなかった。「もし結婚するとなったら、山の中の小さな教会で、式をあげたいとおもいます」

いくらかセンチがかった男のロマンティシズムは、お嬢さんをくすぐる。いくら、ドライといわれる現代娘でも、さりげなく発露する抒情には、素直に感応するのである。そういうことを書いた候補には、例外なく引く手が集まっている。

身のまわりに無トンジャクな青年は、眉をひそめられる。かまわないのが男の美德——みたいにおもわれたのは戦前のこと。身なりなどについて、センスゆたかな描写をした人は、がいして点がよかった。

どんな系統の色が好き。配色はどう。ネクタイは、こういうムードのデザイン。そんな自己紹介が、女性の感覚に訴えるようだ。

## (12) ファイト 100%

内省的な表現は、あまり受けなかった。一見ひかえ目に、しかも、実は少々ハッターをきかせた自己宣伝が、なかなか女ごころをつかんでいる。

「ファイトだけは 100 パーセント」「仕事とあれば、徹夜がつづいても平気」「短気なり」かなりドギツくても、個性の強そうなのが、反響を呼んだ。

### 記事抜粋：『結婚』を再検討する』『新週刊』1962年10月2日号

労働省婦人少年局が、最近発表した「風紀についての意識」調査（昭和36年4月実施・全国の満20歳以上60歳未満の男女各1450名について訪問面接）報告がある。（以下、要約）

問：望ましいと思う結婚の仕方

男性「恋愛結婚」…40%

女性「交際結婚」…37%

「交際結婚」…31%

「恋愛結婚」…28%

「どちらでもよい」…21%

「どちらでもよい」…21%

「見合結婚」…6%

「見合結婚」…9%

\*男女とも、年齢が低いほど「恋愛結婚」をのぞみ、年齢が高くなるにつれて「交際結婚」（見合いをしたのち、交際し、結婚する）をのぞむ傾向が認められる。

問：結婚前の純潔について

「男も女も守るべきだ」…男性 65%，女性 80%

「守れたら守った方がよい」…男性 27%，女性 17%

### 記事抜粋：「彼女たちはどんな男性を求めているか？」『平凡パンチ』1964年11月30日号

\*以下、社会心理学者の石川弘義を中心として、18 - 30歳の未婚女性 3000名を対象に『平凡パンチ』編集部が実施したアンケート調査による。アンケートは回収 2176名、さらに 28名の未婚女性との面接調査も実施された。なお、回答者は以下の企業の協力によって得られた。厚木ナイロン、日本石油、東洋レーヨン、大日本製薬、西武化学、関西汽船、不二商事、日本ペイント、住友銀行本店、帝人、プラチナ万年筆、京王デパート、その他

問：何歳くらいの男性と結婚したいか

答：27歳…24.5%      28歳…21.6%      (29歳以上は合計しても 16.1%)

問：相手との年齢差は何歳をのぞむか

答：5歳年上…33.6%      3歳年上…20.8%      4歳年上…16.2%

問：何歳で結婚したいか

答：23歳…33.2%      (以下、24歳、25歳、22歳の順で、全体の 83.0%)

「わたしは 22歳。このくらいがいちばん売れクチもいいし子供のことを考えると 23歳までには結婚したいと思います」(山脇服飾学園・21歳)

「25歳をすぎると性格もキツクなるし、はたからみてもオールドミスにみえる。適齢期は人によってちがうと思いますが 25歳までには結婚したい」(Mデパート・21歳)

こうしてみると、女性は、自分が 23歳のとき、27, 8歳の男性と結婚することを理想としているということになるようだが、これについて石川弘義氏は、  
「これは、女性が非常に現実的、打算的で、無意識にせよ、結婚をメドに自分の一生について非常に適確な計算をたてていることをしめしている。」

アンケートに回答した未婚女性の 75.1%が高卒だが、23歳は高卒の BG が入社 5年目の年齢だ。彼女たちは職場のエキスパートで仕事は彼女たちのほうがよく知っているのに、大学新卒の新入社員より身分が下なので、どうしても不満を感じる。

いっぽう新卒の社員にしてみれば、彼女たちがけむたい。そのため、ともすると人間関係がうまくゆかなくなる。

そうかといって企業にしてみれば BG の大半は 25歳をすぎるとやめてしまうので、責

任の小さな単純労働しかあたえられない。そのため仕事にもあきてくるので、もともと一生勤めるつもりのない彼女たちは、働く気持ちをなくしてしまう。こうして、企業にとってはもっとも扱いにくい存在になる。

そのため、ますます会社にいづらくなってやめるというケースがおおいので、“BG5年定年説”がうまれるわけだが、たしかに23、4歳という年齢はBGの曲がり角といえるだろう。

肉体的・生理的・感情的な成熟もあるだろうが、この現実が23歳で結婚したいという希望をうむ原因になっている。

つぎに、相手の男性の年齢だが、3～5歳年上、27～8歳を希望するのは、無意識のうちにも結婚を出発点とする一生の展望をえがいているためとみてよいだろう。

23歳で28歳の男性と結婚し、自分も勤めながら結婚後2年間は2人だけの生活をたのしみ、2年目あたりで最初の子供を産んで、自分は退職する（夫30歳、妻25歳）、子供がひとりだけではさびしいので3年してはじめての子供に手がかからなくなったころ二番目の子供を産んでおく。

こうすれば、定年退職するときには（夫55歳、妻50歳）、第一子（25歳）は会社のエキスパート、第二子（22歳）も大学を卒業して新入社員になるので、もう子供たちに金がかからなくなっているから、あとは退職金で老後の生活を楽しむという段取りだ。

このような人生設計が理想的だ、とするのが、最近の傾向のようだ。

相手の男性の年齢27、8歳ということには、もうひとつの意味がある。

それは結婚の経済的な基盤ということで、相手の男性に最低3万円の月収がなくては不安だが、平均的サラリーマンが月給3万円になるには、だいたい27、8歳にならなければ無理というのが常識。

女性はこの現実をたいへん適確にみて、それに順応しているわけだ」

問：相手の月収は最低いくらを希望しますか

答：3万円以上…31.1%（以下、3万5千円以上、4万円以上の順）

なお、3万円以下は7.9%、4万5千円以上も16.1%と少ない。

問：共稼ぎでもよいか

答：共稼ぎでもよい…61.4%

「完全に家庭の主婦になってしまうと、自由がなくなってしまうから、共稼ぎをしてもいい。勤めていれば、会社にいる間は結婚してからも自由じゃないのかしら」（BG・22歳）

「結婚してからも5年くらい勤めていたい。自由がほしいし、家庭にとじこもると早くフケるから」（BG・20歳）

「社会とのつながりを失いたくないし、できるだけ視野を広めたいので、50歳くらいまで社会的な体験をつんでゆきたい。でも自分の収入をアテにされるのは困る」(用品店員・20歳)

こうしてみると、①経済的には夫の収入が生活を保証する、②妻が何かの職業について働くにしても、それは、家計のためであるよりも、妻の自由や社会的視野をひろめるためであること——というのが、結婚後の生活に未婚女性が期待している最大公約数的イメージであるようだ。

これについて、石川氏は

「このイメージの背景には、皇太子と美智子妃の家庭のイメージがある」と断定して次のようにいう。

「昭和30年ごろからはじまった消費革命が『君の名は』に代表されるような戦後的恋愛至上主義時代にピリオドをうち、昭和34年あたりからマスメディアによって消費革命をバックにした家庭のイメージづくりがおこなわれて、マイホーム主義時代にはいった。マイホームの理想型が皇太子と美智子妃とナルちゃんの家だ。それは手のとどかない存在だが、サラリーマンやBGにとっては自分たちの理想的サンプルのように思えるわけだ。美智子妃は美人で、ナルちゃんは可愛い。ここには平和でしあわせなムードがいっぱいあふれている。——こうして、多くの未婚女性にとって妻のイメージは美智子妃によって代表されるものとなった。美智子妃は生計のためにはたらくということはない。そうかといって、普通の主婦のように家庭の中に閉じこもっていないで、社会的な場に姿をさらわす。それが“教養”や“視野”のための妻の職業という形をとってあらわれるわけだ」

この石川氏のことばを裏書きするように、座談会でも、

「好きな人となら“手鍋さげても”いっしょになりたいなんて、全然問題にならない。なんといっても結婚すれば生活が第一の問題になります。まして、生まれてくる子供のことを考えれば、お金が大事です」(BG・23歳)

「団地の2DKにテレビくらいは最低ほしい。そのうえで、電気冷蔵庫などを徐々にそろえてゆくというのが理想」(学生・21歳)

「庭の芝生で犬がじゃれてるそれをながめながらダンナさんに紅茶をいれてあげる——そんな情景を想像すると、とてもほほえましい気持ちになる。できればぜひそういう家庭をもちたい」(アクセサリー店員・23歳)

こういう発言は、多くの出席者の共感を集めていたようである。

問：結婚へのプロセスについて

答：形式にこだわらず相手次第…68.5%

見合いから恋愛に入るのが望ましい…12.9%

恋愛結婚でなければイヤ…10.4%

恋愛の過程を通らなくてもいい…4.2%

見合いは絶対イヤ…2.5%

将来を考えると見合いがいい…1.2%

恋愛結婚絶対支持者がわずか一割というのは、かつての恋愛結婚に対する信仰がさめたことを証明している。形式にこだわらないのが7割近くだが、現実的な打算の表われといえよう。

一方「結婚は危険性が少ない見合いがいいのですが、結婚する前に一度、素敵な恋愛を経験したい」(BG・21歳)という“バラ色の恋愛”に対する憧憬も根深い。「恋愛から結婚へ入るのが理想」(BG・23歳)だが、職場の男性に幻滅を感じ、ほかの男性と知りあうチャンスがないことも手伝って、打算的な現実主義者になるわけだ。結局“バラ色の恋愛”が“バラ色のマイホーム”にとってかわって、マイホームづくりへのコースを歩むことになる。

問：相手の性経験について

答：童貞にはこだわらない…35.3%

絶対童貞でなければダメ…22.4%

多少経験があったほうがいい…14.5%

無関心…16.6%

「雑誌ではセックス記事を読みますが、よくわかりません。やはり男性にリードしてもらいたいですね」(BG・20歳)

「初夜の失敗ということをききますが、性経験のある男性ならそんなこともないでしょうから」(BG・21歳)

つまり、セックスに対する神秘感が初夜の不安に通じているとみられるし、経験者は初体験の不様な記憶をくり返したくないという気持ち、年々処女率が低下している一方、婚前性交にまだ罪悪感を持っているため相手も経験者のほうが気がラクというのが理由のようだ。

問：相手に望む職業

答：①エンジニア…41.9% ②商社会社員…11.6% ③銀行員…6.6%

④ジャーナリスト…6.2% ⑤中小企業経営者…6.1%

⑥公務員 ⑦広告代理店社員 ⑧自家営業 ⑨デザイナー

エンジニアの人気は圧倒的である。(中略)とはいえ、サラリーマンの堅実さをのぞむ人も多い。

「家が商売なので家庭の中まで仕事が入りこむのがイヤね。それに日銭が入るので比較的豊かですが、商売上はやりくりがたいへんらしいです。その点、サラリーマンは仕事を離れた自分たちの時間をもてるし、気もラクでいいわ」(BG・23歳)

というように、家庭経済と家族団らんのムードを計算した上でのサラリーマン希望が圧倒的に多い。自家営業、自由業に人気がないのも逆の意味でうなずける。

しかし、ホワイトカラー気質に対する批判もある。

「上役の機嫌を気にしながら、事なかれ主義で過ごしている男性なんてイヤね。ときには上役と対立してでも自分の主張をもって意欲的に仕事をしている男性には男らしい頼もしさを感じます」(BG・25歳)

ジャーナリストの魅力もこの点にあったわけだが

「35年ごろを境として希望者がへってきた。ジャーナリストのサラリーマン化、マスコミの発達でジャーナリストの希少価値がなくなったこと、広告産業が急に伸びて、マスコミが広告界に依存せざるをえない状態になったため“無冠の帝王”のイメージが崩壊したという社会的背景も見逃せない。また、ジャーナリストは時間的に不規則なため、結婚の相手としては歓迎されないこと、弊衣破帽につながるイメージが女性の美意識とマッチしない、なども理由とみられる」(石川氏)

その点、商事会社の社員には女性の好みに合ったスマートさがある。

「一流商事会社の男性はスマートだし、仕事の性格上、国際的な感覚も身につけている。お給料も高いし、結婚相手としては申しぶんないわ」(BG・21歳)

企業の安全性からいえば公務員希望がもっと多くてもいいわけだが、学閥が強く出世しにくい、動きのない地味なイメージが嫌われているようだ。反面、中小企業経営者に対しては倒産の危険性もあるが、将来性への期待もあって比較的人気が高い。

問：相手の条件で、何を重視するか

答：①誠実 ②健康 ③愛情 ④明朗・ユーモア ⑤尊敬できる ⑥理解力  
⑦仕事に対する意欲 ⑧頼もしさ ⑨生活力 ⑩清潔さ ⑪スポーツ好き  
⑫やさしさ ⑬抱擁力 ⑭知性・教養 ⑮将来性 ⑯センスのよさ

エンジニアの人気が高いのは職業としての意味だけでなく、エンジニアのイメージが男性の理想像に通じているからでもある。

「電気計算機の技術研究室に勤めている男性を知っていますが『鉄人 28号』とか『サザエさん』の漫画の本をよく持ち歩いているんです。趣味が広くてユーモアがあって、人間的にすごく大きい感じ。だから何を話しても受けとめてフワッと包んでくれる感じですね」

(BG・23歳)

「仕事が建設的でスケールが大きいせいも、頭脳労働にありがちな深刻さや視野の狭さがないですね。それに、現場にも出るし機械も操作するので活動的だし、全面的に頼れる感じ」(共立女子大2年)

「兄が建築設計技師ですが、細かい仕事のわりには神経質なところがないし、レコードをきいたりスポーツが好きだったり、気持ちの余裕があるみたいです。ハンサムではないけれどセンスがわりあいいいですね。わたしのお友だちの間では評判がいいみたい」(青山学院2年)

これらの発言でもわかるように、仕事の性格と人格との関連性——近代産業の先端をゆく頭脳に対する尊敬、仕事の近代性に通じるスマートさ、仕事のスケールの大きさからくる豊かさなどが“すてきな男性”として見られているようだ。

最近の目立つ傾向は“背の高さ”を重視していることだ。

「結婚相談所に来る女性の大半は希望条件として収入、年齢、家族関係などといっしょに、背の高さを書く人が多いですね。2, 3年前からとくにふえています。相手を斡旋しても背が低いという理由で断った例がいくつかあります。人間の本質とはなんの関係もないと話しても、なかなか納得しませんね」

と(東京都立結婚相談所)高山所長は語っている。本誌アンケートの結果は、

自分より高ければいい…79.7%

無条件に高いほうがいい…14.5%

背丈にはこだわらない…5.8%

最低165から170センチ以上を希望している人が半数以上で、あとの大半は『高いほどよい』と答えている。



【1965 - 1969】(昭和 40 - 44)

## 戦後ベビーブーマー (女性) の婚期到来

記事抜粋：「終戦っ子の結婚戦争だ！」『サンデー毎日』1966年10月23日号

(略／厚生省の調査では) 最近 5 年間の初婚の平均年齢は、男 27.3 歳、女 24.5 歳で、その差はほぼ 3 歳となっている。“終戦っ子” 女性すべてが、3 歳年長の男性を結婚の対象としたら、どんなことになるのだろうか？ (中略)

まず、19 歳 (昭和 22 年生まれ) の女性は 114 万 5000 人。3 歳年上の昭和 19 年生まれの男性より 16 万 8000 人も多い。その 1 年下の 18 歳では、39 万 8000 人の女性のはみだすことになる。このアブレは、いま 17 歳の女性でピークに達し、44 万 5000 人にもなる。

男性のほうについてみると、いま 19 歳の男性は 3 歳年下の女性よりも 10 万人多い。これが昭和 24 年生まれ、いま 17 歳の男性になると、約 31 万 7000 人も 3 歳年下の女性が不足することになる。こんな女性不足の状態が、ことし 14 歳ぐらいの男の子にまでおよぶ。

こんなわけで、女性の結婚の年齢を 23, 4 歳とすると、4, 5 年後にまず女性側の深刻な結婚難がおとずれる。一方、男性では、結婚年齢を 27, 8 歳とすると、9, 10 年後には逆に男性側が、結婚の相手をさがすのに苦労しなければならないことになる。

もちろん、以上は 3 歳違いということ为前提にしての話である。同年同士、あるいは“姉さん女房” でもかまわないとなれば、問題はスムーズに解決できる。だが——男がより若い女性を求め、女が物質的、精神的に安定した男性を求めるといふ心理には、どうやらきわだった変化が起こっていないようだ。

(中略)

新宿生活館で、昭和 26 年から 8 年間、結婚あっせんの仕事にとりくみ、現在は東洋大学社会学部教授の塚本哲氏は、問題をこう指摘する。

「年齢差のほうは、あまり心配はいらんとと思いますが、私の気になるのは、結婚についての考え方が乱れてくるんじゃないかということです。経済的に男性にたよれないということになると、女性はいやおうなく、経済的に自立することになりますね。それにつれて、結婚なんてどうでもいい、いまさらオクさん家業をやれるか、というような気持を強めてくるんじゃないかと思います。現に結婚より、自分のライフ・ワークにかけるというような女性がふえています。その一方で、妻のある人とでも、家庭さえ乱さなければ、というようなムードができてしまう。男のほうも、結婚はたいへんだから、まあ遊ぼうやという気持を強めてくる。無責任で、不心得な男性がふえてくるおそれがありますね。経済的な条件に恵まれないことが、いっそう事態を悪化させるでしょう。ベビー・ブームの子は就職のほうでも、競争が激しくてなかなかいいところには入れないでしょう。それにいまの女性は、むかしのように“手ナベさげても” なんていう気持は、さらさらしない。まあ、男女ともに消費文化へのあこがれは強くなる一方のようですね」

【1970 - 1974】(昭和 45 - 49)

## 新たな理想像は“友だち型結婚(友情結婚)”

- ◆「トラック 1 台分の女に男は 1 人の割り当て」…適齢期男性の圧倒的売り手市場
- ◆同年、あるいは 1, 2 歳違いの男性との結婚が見直される(ただし、理想の結婚相手は相変わらず 4, 5 歳年上の“たよれる”男性)
- ◆“夫の従属物としての妻”という古い観念からの脱却?…年上妻の増加が注目される
- ◆傷つきやすい恋愛結婚より、友達関係の延長みたいな「友情結婚」という選択

**記事抜粋：「一流会社の独身社員が…」『週刊現代』1973 年 3 月 29 日号**

一流会社の独身社員が胸に秘めているワイフ像…(略) この願いには、“男性上位”“男性の復権”の姿勢が、かなり鮮明にうかがわれる。もっとも男性側が高姿勢になっているにはそれなりのワケがあるのだ。いまの結婚適齢期の男性(とくに 27~29 歳)は、圧倒的に売り手市場なのだ。(中略) 近頃のヤングは、何を考えているか分からないとよくいわれる。しかし、ここにご登場願ったエリート社員の結婚観は、むしろ古風な印象を与える。「家庭を切り盛りする才能があるかわいい女。男が女に求めるものは、いつの時代でもどこの国でもたいして変わらないものですね」(評論家・赤塚行雄氏)

**記事抜粋：「最新・婚期に乗る法」『微笑』1973 年 11 月 17 日号**

“男 1 人に、トラック一杯の女”この言葉に象徴されているように、現代は女性にとって、まさに“結婚難”の時代といってもいいでしょう。

「お嫁にはいきたいんだけど、なかなかいい人がいなくて……」こんな考えを持っているあなた。少し考え方を変えてみてください。あなたが求めている“いい人”とは……?

たとえば年齢差、学歴、そして男性の職業……あなたは“結婚相手のワク”を自分で狭めているともいえるのです。(中略)

かつて、理想的結婚の男女年齢差は“男 4 才年上”といわれてきました。確かに、この説には根拠もあるのです。結婚調査センター所長・五百木(いよぎ)文二氏の話。

「女 25 歳、男 29 歳で結婚するとして、収入、男性の精神的余裕……そうした面から、4 歳違いの結婚というのは、家庭生活が安定しやすいという利点が、あったわけですよ」

しかし、現代ではその“利点”だけで家庭を維持することが困難になってきたのです。というのは、いわゆる、学歴、社会生活といったすべての面で、女性の地位が向上し、それにつれて、男と女(夫と妻)の精神的連帯が、重要視されるようになったからです。

いいかえれば、“夫の従属物としての妻”という、古い観念から、本当の意味で、女性が解放されてきたということでしょう。

「その意味から、現在、見直されているのが、同年、あるいは 1, 2 歳違い(上にしろ、

下にしろ)の男性との結婚ですよ。経済的には、結婚の時点では、少し苦しく、共働きということになるでしょうけれど、そのハンデさえ乗り切れる心がまえがあるなら、同年輩の男性との結婚をもっともっと考えてもいいと思います」

その具体的利点を、詳細に調べていくことにしよう。

「私、大学時代の同級生と 24 歳のとき結婚したの…ええ結婚に関して、後悔したことなんて一度もないわよ。(略) どういう点が幸福かっていうとねえ…そう…いつも友だちみたいでいられるってことなの。日曜日に、よくいっしょに買物に行ったりするけど、いつもおそろいのパールック、おそろいのブルージーンズにポロシャツを着て、仲良く手をつないで…。近所の人たちにも“あなたたちは、いつまでも恋人みたいでいいわねえ”って…」(田代京子さん・昭和 46 年に結婚・26 歳)

田代さんの話からもわかるように、同年輩結婚の最大の利点は“いつまでも、友人の延長でいられる”ということ。(中略)

・家に全然お金がないのに、わざわざ友人から借金して、六本木の高級レストランに食事に行く。

・夜中に、共通の友人を呼び出し、麻雀。

・ケンカする時も、遠慮なく茶わんやコップを投げて、大ゲンカ……。

年齢差の違いすぎる夫婦だったら、けっしてこうはいかないだろう。

7 歳年上の男性と、見合い結婚した深見佳子さん(現在 34 歳)は……

「家の中の生活が堅苦しくて……夫は、本当に“お茶のいれ方”ひとつにしても、私を教育しようとするんです。どういうんですか、私を子ども扱いして……そのくせ、自分の体力的なことについては自信がないんですね。私が、大学時代の友人(ボーイフレンド)とお芝居を見に行ったりするとヤキモチをやいて……それなのに、そういう時に限って、夜の愛撫は、もう、たまらないくらいにしつこいの……本当に息がつまりそうで、3 年くらいで別れてしまいました」

極端な例なのかもしれない。しかし、こうした傾向は、年齢の違う夫婦には、多かれ少なかれみられるのである。年齢が 5 歳以上離れた夫婦に会い、調査してみた結果、“趣味、話題が違いすぎて、夫婦の話し合いは、子どものこと以外まるでない”

という意見が圧倒的に多かったのである・“TV の歌謡番組を夫婦そろって、冗談をいいあいながら見る”という雰囲気は、結婚生活にとって、意外と、重要なことなのだと見えるのである。

(中略)

「結婚についての実態を調査してみると、現代はいわゆる“3 トモ結婚”が、激増していることがわかるんです」(前出・五百木さん)

五百木さんのいう“3 トモ結婚”とは“友人”“共学”“共働き”のこと。

この傾向は、アメリカでも同じ。それに共働きの問題も年齢差が近ければ近いほど、そ

のトラブルが少なくなっているということができる。

「若い人はね、共働きは当然だと、もう、はっきり割り切っているんですよ」(五百木さん)  
ところが、男性の年が高くなればなるほど、“共働きは、自分のプライドが許さない”などと、妙な見栄をはりがち。

年齢の高い男性には“妻は俺が養っている”との意識が、根強く残っているのである。

また、そのことは独身女性にも裏返しの意識として潜在しているようだ。本誌が今回取った“理想の男性像”のアンケートの結果、ベスト5を次に紹介してみよう。

「ゼツタイ年上。男性的で女性にやさしく、時にはきびしく、**たよりがいのある人**」(銀行勤務・菊池その子さん・20歳他)

「**身長170センチ以上**でスマートなセンスある二枚目」(OL・木村文子さん・19歳他)

「**経済力のある人**」(ホステス・伊賀弓子さん・23歳他)

「**家つきカーつきババぬきのスポーツマン**。時には2人っきりの旅行に連れて行ってくれる人」(今村栄子さん・20歳・学生他)

「**サラリーマンじゃなく、長髪が似合い、デザイナーみたいな職業の人**」(藤井由美さん・19歳・家事手伝い他)

他にも“メガネをかけた人は絶対イヤ!”などの外見的条件をあげた人も多かったのだが、現実的な生活の面から男性を語ってくれた人は、数えるほどしかいなかったのである。

これは、結婚に対しての考え方の甘さを示しているというほかない。男性とは、作家の田辺聖子さんもいっているように、「家庭に帰ったら、パンツ一枚で、平気で尻をこくような存在」であることも忘れてはならないのだ。

結婚生活は、ただ“カッコよさ”では割り切れはしない。現実の統計から割り出された、もう一つの事実——それは、同年輩の男性と理想的な夫婦生活を送っている女性には、その独身時代“不特定多数のボーイフレンド”を持っていた人が多いということ。

その中の一人である、山路昭子さん(27歳)の述懐。

「うーん、大学時代から男友だちは多かったわよ。うん、現在の主人も、大学時代のボーイフレンドの中の一人だったんだけど…あのね、大勢の男の人とつきあっていると、男性への幻想みたいなものを、それほど持たなくなるわけ。いろんな男の人で、どのひとが自分をいちばんよく理解してくれるのか、それが、重要だってことがわかってくるのよ。男性を見る目がこえるというのかなあ…これは重要だと思うわよ」

だが、そうはいっても、女性も25歳を越えるとそろそろ“結婚”への焦りを感じはじめるのは事実です。そうでなくとも、冒頭にも述べたように、現在は“男1人に女はトラック一杯”といわれるほどの“結婚難時代”まごまごしていると、自分は永久に結婚できないのではないかと不安が、ややもすれば、あなたを襲いがちになるのも、故ないことではありません。

しかし、その不安は、取り越し苦労。もう少し長い目で現実をみつめてください。ここに、ひとつの具体的な統計資料があります。

それは、昭和 51 年（いまから 3 年後）になると、結婚適齢期（男性 27～34 歳、女性 20～27 歳）の男性の数が、女性より多くなるということ。

「結局、あと 3 年待てということなんです。あと 3 年待てば、この“結婚戦争”は、ずいぶん緩和される」（サロン・ド・アムール所長・武田氏）

“それまでには、年をとりすぎて、おばあちゃんになってしまう”という人もいるかもしれませぬ。しかし、それも…

「時代的風潮として、女性が年上でもかまわない、という男性も確実にふえています。結婚は“年齢”によってするものではないという考え方…それよりも、精神的な若さが重視されるようになりますからね。3 年後に精神的に老け込まないように、今は気楽に生活をエンジョイすることです」（武田氏）

#### **記事抜粋：「見合い・恋愛型を圧倒する「友情結婚派」『週刊朝日』1974 年 5 月 31 日号**

いま女子大のキャンパスに奇妙な新語が流行している。女の園を吹き抜ける薫風に乗った、その新語「友情結婚」というフィーリングたっぷりの囁きは、なにか現実離れのイメージを誘うが、実は、彼女たちの在来式結婚への不信の表明なのだ。

（中略）

恋愛結婚はこわいからお見合いにするという消極型から、大学時代にどんどん恋愛して、結婚は条件のよいお見合いをという実利型までさまざまだが、恋愛結婚したいという人は案外少ない。それに、意外というか、友だちみたいな結びつきが理想らしい。理由は「大真剣大会」になって、「泣きを見るのはいや」（深刻になって泣くのはいやという意味）というわけだ。

彼女たちの口からひんぱんに出てくるのが、「友情結婚」といういかにもフィーリングありげな新語である。

女子美術大 3 年の T 子さん（22）もその新語派の一人だ。

「お互いに縛られない、共同生活みたいなのがいいわね。同棲っていうのはなんだか不潔な感じがするし、かといって、緊張感のないベツタリ結婚もしたくない。桐島洋子みたいな、籍も入れないし、同居もしないっていう結婚、ちょっとうらやましいとは思うけど、自分でそれができる自信はないわね。だからやっぱり、男も女も仕事をもって、違う世界に生きながら、根本になる生活は一緒っていうのが理想だわ。精神的にもあまり束縛しあわないで、友だち同士みたいな夫婦って、案外いいんじゃないかしら？私は男にあんまり夫でございみたいな顔されるのいやだし、私もそうしたくない」

そばから友人の O さんも言葉をはさむ。

「たしかに、私たちの年代って、なにによらず縛られるのがすごくいやね。そのくせ、なにか決まったものがない不安がいつもあるわけよ。自分のいるべき場所をいつも探しているくせに、その中におさまるかえることに反発を感じるし」

複雑な彼女たちの胸には、傷つくことへの恐れが無意識にあるようだ。

日本女子大の E 子さん (21) も、そんな不安をチラッと見せる。

「ある人を好きになった時、その人を縛りたいという気持ちと、縛ってはいけないという気持ちと、すごく対立するわね。愛って育てるものだとはいうけど、それには忍耐のほかにはテクニックやかけひきも必要だと思うし、むずかしいでしょう。結婚したとしても、自分は毎日家において、夫は外に出かける。愛する男を放し飼いにしても、自分のもとに戻ってくるという自信がなかなかもてないんじゃない？これだけ刺激の多い世の中だから」

そんな不安が、傷つきやすい恋愛結婚より、むしろ友だち関係の延長みたいなクールな「友情結婚」というかたちを求めさせるのかもしれない。 (中略)

あれこれ聞いて、彼女らの話を総合すると、「友情結婚」の特徴は、

- ①恋愛みたいに「アバタもエクボ」といった幻想をもたず、相手のよいところ、悪いところをお互いに冷静に知ったうえなので、一大決心などとは無縁に、気軽に結婚できる。
- ②年齢差は問題にしない。げんに同年齢か一つ違いのケースが急増中。男が年下のほうが多いというのも多い。
- ③結婚式とか入籍とかにはこだわらない。やってもいいし、やらなくてもよし。
- ④生活は、共働き、財産別立て、家事協働。
- ⑤男の役割、女の役割はケース・バイ・ケースで流動的
- ⑥夫婦の水平関係が第一。親子の垂直関係は、あまり視野にない。
- ⑦別れる時が来れば、サッパリと。

この「友情結婚」は、昔ながらの見合い結婚や恋愛結婚に反発して出てきたものだろう。(中略)「見合いや恋愛結婚と同志的結婚のどちらにも決められない、幼なじみの共犯関係というべき妥協の産物さ」と決めつける男子学生 (23) もいた。はたして、妥協にすぎないのか、それとも新しいかたちの男女の結びつきへ向かう過渡期的な現象なのか、そこははっきりしないが、とにかく、「友情結婚」という新しい船を漕ぎ出したいという女子学生たちは、これからますます多くなりそうである。

## 【1975 - 1979】(昭和 50 - 54)

### “女にとって結婚とは何か？” “結婚適齢期とは何か？”

- ◆ “結婚” とはいったいなんなのだろうか——女性誌が“結婚” そのものを問う
- ◆ 社会的影響力を保持する“結婚適齢期” = 結婚を起点とする人生設計モデルの持続
- ◆ 「自立する女」「結婚しない女」という言葉が流行語のようにいわれても、現実には、結婚したい、男性を頼りたい女性が多い
- ◆ 〈結婚=女の幸せ〉図式に変化……25～39 歳の女性の 25.1%が「自立できれば、あえて結婚しなくてもいい」との考えを示す……家庭志向と自立志向の交錯

### 記事抜粋：「MORE 特別企画 いま、結婚を考える」『MORE』1977年11月号

(略) A 子という個人であった女が結婚すると、なぜ〇〇さんの奥さんという代名詞で呼ばれるようになるのか。(略) 自分の意思でものごとを選択しながら生きようとしている私たちにとっての“結婚”とは、いったいなんなのだろうか。私たちにとってよりよい結婚についてもう1度、自分たちの目で見つめ、自分たちの言葉で考えてみる必要があるだろう。(略) そこでモアでは21歳から34歳の未婚、既婚、の女性45名に、それぞれ質問項目をわけアンケートを試みてみた。(以下、未婚女性へのアンケート結果を要約)

問：なぜ結婚しようと思うのですか？

「1人ではやっていけないし、1人の不安感もあるし、自分を理解してくれる相手がいるのはいいことだし。一緒に暮らすことで困難さがつきまとうけれど、つっぱって結婚しないって理由はないし、対世間を考えたとき、籍を入れておいた方が問題が少ないから」(26歳・デザイナー)

「心のむくまま、ナチュラルに生きてその結果1人の人といつもいるっていう形になれば最高だけど、まったく世の中を無視して生きていられるほど、自分は強くないと思うから……」(25歳・PR誌編集)

彼女たちの「結婚したい」という声には、自分を理解してくれる人と人生を共に歩みたい、1人で生きてゆく自信がないという気持ちと、結婚した方が社会の中で生きてゆきやすいという、世間一般の目を意識した気持ちとがないまぜになっているようだ。(略) 未婚女性が結婚を考えるとき、世間の目や、ごく一般的な結婚観が大きな比重を占めている。

問：結婚後も仕事を続けますか？

結婚しても仕事を続けるという考えが、仕事を持っている未婚女性の中に確実に定着してきている。しかし仕事を続けると答えた13人のうち1人は、結婚後の状態によってやめるかもしれないと答え、2人は子供が産まれたら仕事をやめるべきだろうと答えている。

問：あなたの理想とする結婚は？

「何事においても束縛されず、一緒にいることでより心豊かで、手ごたえのある生活がおくれればと考えています」(34歳・経理事務)

「相手との価値観が同じでなければね。これがいちばん大切だと思う。自分の人生だから、自分の人生の目的にそって生きたい。それは相手も同じだと思うし、そのところを2人が認めあい、理解しあって生活していくことが理想です」(24歳・グラフィック・デザイナー)

「結婚が自分の人生の中で1つの過程であればいいと思う。大げさなものでなく、小学校から中学へ進むように、独身から夫婦になる。そうであればいいと思います。学校を選ぶときに、少しでも自分の才能を伸ばせるところを選ぶように、結婚相手も『ああこの人なら私の良さをいかせるのでは』と思えばいいです」(22歳・OL)

「籍も入れないで、子供も生めて、それでいて社会の中で生きていける個人と個人の生活が理想です。別々に暮らしていても、生きていく上でどこか最終的なかわり合いを持っていけるような」(26歳・デザイナー)

「理想は契約結婚ですね。だって一緒に住んでみなきゃわからない部分って多いと思うの」(29歳・OL)

未婚の女性たちの考える結婚。そこには、期待感と不安感が一体となった未来がある。このアンケートを終えていちばん強く感じたことは、彼女たちが、ごく素直にあたりまえのこととして、結婚をとらえているということであった。

そしてもうひとつ、彼女たちの心の中に必ずといっていいほど、世間一般の常識や世間の目といったようなものがある。それが具体的になんであるかは、個人個人によって違いがあるだろうが、彼女たちの口にする結婚、考える結婚が、世間という一般的な概念にとられすぎているのではないかという気もした。

### 記事抜粋：「やっぱりある！結婚適齢期」『週刊女性』1979年7月31日号

#### ①エリート男性の“メ切りつき結婚観”がつくりあげる適齢期とは？

(略) 企業の出世コースに乗っている男性の影の声を聞くと 27～8 歳までに結婚し 30 歳までに 1 度や 2 度海外に飛ばされるぐらいでなければ出世はおぼつかないというのが常識とか。(略) 女性の本質的なものは、年齢によってなら変わりはないのに、男性の焦りが適齢期を過ぎた女性を売れ残りのように思わせている (略) 出世がからんだ男性のメ切りつき結婚観が、23～4 歳という女性の適齢期をつくりあげているのです。

#### ②男は女性の過去に敏感。女性は年齢が高くなるにつれて疑いの目で…

(略) 「年齢が高くなるにつれ、どうしても疑いの目で見られやすくなりますね。なぜこの年齢まで独身でいたのか、という点が調査の主眼になります」

「女性が 23～4 歳、男性が 27～8 歳のカップルの場合、男性側が地方の両親を説得するた



めの資料として「素行調査」報告書を持って帰ることが多いようです。自分は相手を信頼しているけれど親のために…という感じです」

女性が 27~8 歳になると、男性本人が疑問を持っていることが多いとか。

「昔は女性が男性の素行調査を依頼するケースが多かったのですが、今は男性のほうが多いぐらい。それだけ女性の行動が自由になった証拠だと思いますが、いずれちゃんと結婚したいと思うなら、若いうちに派手に遊ばないことです。まあ、1, 2 回の過ちには目をつぶる男性が増えてきているようですが」

### ③男ばかりでなく、女性側でもつくっている適齢期の正体は？

適齢期と呼ぶかどうかは別として、23 歳を中心にした 3~4 年の間に結婚する女性が多いのは事実。総理府の統計では 34 歳までに 98%の女性が結婚するという。欧米では、一生独身で過ごす人が 10%以上なのにくらべてとても少ないのが特徴です。

なぜそんなに急ぐのかという点について、評論家の樋口恵子さんは、「女性一人で食べていくのがたいへんな世の中だからです。生きのびていくために、収入のいい男性と早く結婚しなければならぬわけよ」

実際、男性と女性の賃金の差は年齢とともに開いていくのが普通。勤め始めたころは男女の差も目立たず、意気揚々と仕事をしていても、30 歳ぐらいになると、同僚の男児社員の 4 割引の給料。役職にもつきにくい現実に直面するというわけ。

もちろん、能力をフルに生かして男性よりも高い収入を得ている女性もいるけれど、そこまでいくには能力と体力、それに時間が必要。30 歳までがんばったけれど芽が出ない、それでは結婚……と思っても、その時点では自分の思いどおりの相手がなかなか見つからないということに……。

「自分の能力を冷静に判断して、自立向きではないと思ったら、早めに結論を出して結婚するのが賢い女性ではないかしら」(略) 23~4 歳が結婚のピークになっているのは、実際に賢い女性が多いせいかも……。

#### ◆結婚の理由 (総理府「婦人に関する意識調査」より)

<男性>

社会的に安定するから…38%

精神的に安定するから…33%

あたりまえだから …29%

経済的に安定するから…12%

みんなが結婚するから…11%

その他

※複数回答可により 100%を超える

<女性>

女の幸福だから …34%

あたりまえだから …25%

精神的に安定するから…22%

社会的に安定するから…11%

経済的に安定するから…10%

みんなが結婚するから…10%

その他

結婚したいと思う動機についての調査結果では、女性の 2 人に 1 人は結婚するのが当た

り前とか、女の幸福と答えています。また別のデータでは、デート費用は男女どちらが払うかという問いに対して 80%が男性という答え。“自立する女”とか“結婚しない女”という言葉が流行語のようにいわれていても、現実には、結婚したい、男性を頼りたい女性が多いのは事実。

適齢期は、男性と女性が互いに求め合う結果として生まれたものといえるでしょう。流行語にまどわされず、自分を見つめることが必要なのです。

### **記事抜粋：「現代女性の結婚の条件」『週刊朝日』1979年11月5日号**

#### **今や料理上手は花嫁の必須条件にあらず**

現在、家庭料理の衰退が案じられている。20代妻や未婚女性たちは、料理を“必須”としなくなった。(中略)料理が実用目的から趣味的に移行したせい、無関心派はまったく作らない。

それに共働き希望者は婚約中の女性で 72.6% (第一勧業調べ) と圧倒的に多い。専業主婦になるより、自立志向型の女性が非常に増えている。今や1日平均7時間、主婦は余暇時間があるそうだから、脱主婦志向はたいへんなもの。

それに日本の男性は仕事中毒だから帰りも遅い。めったに家で夕食を食べるチャンスがないのが実情。帰りのあてにならない夫の夕食を作って待つより、外食ですませたほうがより合理的と思うのも一理なくはない。(中略)

そしてもう一つ。家庭料理衰退の原因と思えるのが味覚の変化。今 20~30 代後半の人たちは、給食のハンバーグやカレーライスがおふくろの味。中年たちの「いもの煮っころがし」を家庭の味と思ってなんかいない。彼らは、外食や、既成のあの単一化された味にいささかの違和感もない。

三浦朱門氏は「せっかくおいしい料理を手間をかけて作っても『給食のような料理作ってよ』と子供たちに言われてがつくりきえているお母さんたちが多い」と書いている。

20代女性も「外食」を「外食」と思っていないのかもしれない。つまり、あれが家庭の味なのだ。洋風のおそうざい屋、つまりデリカテッセンがこのところ急増している。デパートのおそうざい売り場の人気は大変なもの。家庭料理そのものの概念が、ちがってきているのである。(中略)

料理上手は花嫁の絶対条件ではなくなった。「今日もコロッケ…」どころか、「今日もメシナシ…」——。そんな時代はもうすぐそこかも。

#### **翔びきれない女を探し求める処女願望の男**

昨年の大正大学の「女子大生の異性交際と結婚観」によれば、結婚まで純潔を守ると答えた人が 52.3%、結婚相手とならいい人が 17.4%、自由でいいが 12.8%となっている。

純潔組が過半数もいるから、未婚女性の半数以上は処女と思うのは少しばかり短絡的。

彼女たちは「処女であるほうが望ましい」のであって、何がなんでも処女を通すとは思っていない。「最初の人と結婚できれば幸せだけど、できなかったからといって嘆くほどのことではない」(OL・23歳)というのが本音なのだろう。

実際、非処女が増えており、性もかなり自由になったと思われている。なのに純潔組が過半数を示した理由の一つには、男性がまだ、未来の妻に「処女」を望んでいると思っ

ているからである。(中略)

日本の多くの男性が処女にこだわるせいか、一般論としては性の自由を語る女性も、こと自分の性の問題はあまり語りたがらない。(略)日本の性はまだ「個の時代」になっていないと思う。多くの未婚の女性たちは、どこかでこれまでの倫理観に押しつぶされて、翔びきれずにいる。これが現状なのだろう。

### 女性にとって25歳は“脱結婚”年齢

「25歳では売れ残り」と騒がれ、28歳では結婚しなければ売れ残りと思われ、33歳になって結婚しなければレズビアンではないかと好奇の目でみられ、35歳で結婚しなければどこか身に欠かんがあるのではないかと噂される」(瀬戸内晴美「結婚すべきか」)

世間の風の冷たさにはではないけれど、世間の目がうるさくなるから、人並みに結婚したい。こういう女心が精神的に安定したいから結婚したい47.3%(女子大生の意識調査)に現われている。(中略)

とはいうものの現代の未婚女性は適齢期の受け取り方や考え方が大きく変わってきている。NHK総合放送文化研究所の報告によれば、「自立できれば、あえて結婚しなくてもいい」が25.1%。面白いことに25~39歳までの女性のトップはこの考え方。「女の幸福は結婚にあるから結婚したほうがいい」6.6%をはるかにひき離している。

また、今年9月にある化粧品会社がOL、学生に女性の生き方をきいたレポートによれば、「女としてこれからどんな生き方をしたいか」の質問に「仕事を持つこと」と答えた人が17.4%。「結婚すること」と答えた10%と逆転している。

また、第一勧業銀行の調べでは、25歳すぎのOLの関心ごとは「社会の出来事」54.3%で、「結婚のこと」51.9%より上。25歳すぎると、売れ残ったとみじめに思っあせらず、自立の道を立てていこうとする現代女性の意識がはっきりと出ている。

一般に、多くの女性にとって結婚即女の幸福という図式はなくなったようだ。「精神安定上するだけで、しないよりしたほうがいい」というくらいにしか思っていない人が大半。

結婚適齢期は確かにあることはある。が、以前よりはその存在は薄められてきた。彼女たちは24歳は未婚定年ではなく、女の生き方の一つのターニングポイントというふうにとっている。

女性たちはいま「迷いの季節」の中だ。家庭志向と自立志向がクロスオーバーしながら、新しい結婚像を作りつつある。

## 【1980 - 1984】(昭和 55 - 59)

### 結婚に希望がもてない…一方で、見栄と打算の結婚願望

- ◆「婦人に関する世論調査」(総理府, 1980年1月発表): 未婚女性の25%が「結婚を望まない」という結果。(7年前の同様の調査では14%)…結婚観の変化が顕在化…
- ◆結婚に対して、どこかさめている。が、拒否しているわけではない、という女性たち
- ◆結婚に積極的な女性たちのエリート志向…ブランドものさながらの亭主観
- ◆結婚かキャリアウーマンかの対立ではなく、両立させてあたりまえ、という新感覚

### 記事抜粋: 「結婚幻想」は消えたか? 『クロワッサン』1980年3月25日号

結婚なしに女性の幸福はありえない、というのがこれまでの常識だった。

「結婚は女の幸せ」という言い方はそれを端的に表現している。

夫や子どもや、経済的安定や、温かさや優しさや、その他さまざまなものを、結婚が女性に生涯にわたって約束すると考えられてきた。

ところが、総理府が昨年行った『婦人に関する世論調査』は、

このような意識が崩れだしたことを数字的に示した。

それは女性が結婚を、さめた目で見直しはじめたということかもしれない。

#### 〈結婚の意志〉結婚を望まない未婚女性が増加してきた。

総理府の調査は、昭和55年が『国連婦人の10年』の期央でもあり、昭和47年の同様の調査と比較して、「婦人施策の見直しと今後の進め方のための基礎資料」をつくることを目的として行われたものだ。

結婚についての女性の意識が、大きく変化しはじめたことを何よりも端的に示すのは、「結婚を望まない」未婚女性が、14% (昭和47年) ⇒25% (昭和54年) と、大幅に増加していることである。

もちろん、「結婚を望む」未婚女性は62%でいぜん過半数を占めるが(前回は68%)、しかし、その内訳は「ぜひ結婚したいと思っている」32%⇒23%、「ぜひというわけではない」36%⇒39%を合わせたものだ。「ぜひしたい」が、大きく減少しているのだ。

逆に、「結婚を望まない」14%⇒25%の内訳をみると、「特にしたいと思わない」12%⇒18%にくわえ、「生涯する気はない」と強い決意を示す女性が2%⇒7%と急増している。

未婚女性の“結婚離れ”は、このように、数字的に否定しようもなくはっきりとあらわれている。

いったい、何がそれをもたらしたのだろうか。また、それは何を意味するのか。もう少し調査結果をみてみよう。

〈結婚観〉「結婚は女の幸福」が大幅に減少している。

右のような“結婚離れ”現象は、未婚女性の「結婚を望む理由」のうち、「結婚すれば幸福になれるから（結婚は女の幸福だから）」が、この7年間に34%⇒12%と激減していることと無関係ではありえない。

ところで、注目すべきなのは、このような結婚に対する意識の変化が、単に、未婚の（結婚を経験していない）、若い女性にだけ生じているのではない、ということだ。それは、調査対象となった女性全体（未婚者はそのうち9%、既婚者が離死別を含め91%）に、結婚についての考え方を質問した結果にもあらわれている。

7年前も今回も、最も多いのは「なんといっても女の幸福は結婚にあるのだから結婚したほうがよい」という項目だが、しかし、40%（昭和47年）⇒32%（昭和54年）と、はっきりと減少しているのである。

しかも、「一人立ちできればあえて結婚しなくてもよい」で、13%⇒23%と急増し第二位となっている。これが、結婚経験のない未婚女性の観念的な意見なのではなく、既婚者も含めた数字であることは見逃せない。

ちなみに「配偶者に対する満足度」は、「よかったと思っている」のは男性が43%⇒42%と変わらないのに対して、女性は50%⇒44%とはっきり減少傾向を示している。

〈家庭の意味〉「ひとりだちできれば結婚しなくてもよい」か。

ひと言でいえば、女性は結婚についてこれまで抱いていた幻想から、さめはじめたということだろう。

未婚女性の「結婚を望む理由」（複数回答方式）のうち、「結婚は女の幸福」が34%⇒12%と激減したことは前に述べたが、これに代わって増加した項目は特になく、「精神的に安定するから」23%（前回22%）、「結婚するのがあたりまえだから」22%（25%）、「みんなが結婚するから」12%（10%）、「まわりがうるさいから」11%（7%）など、いわば結婚の意味を積極的には示していない項目が上位を占めている。女性は結婚の意味を見失った、ということだろうか。

同じ調査で、「生きがいを持っているか」という問に、「もっていない」と答えた女性が35%（前回31%）だという事実は、それ自体不思議な驚きを感じさせるが、「もっている」65%（前回69%）の内容は（複数回答）、「子ども・孫」56%（53%）、「家族・家庭」13%（同じ）が変化がないのに対して、「自分の職業」17%（9%）、「個人的な趣味」12%（8%）が増加していることが、目を惹く。

それは、女性の経済的自立が進んでいることを示しているのかもしれない、結婚に対する女性の意識の変化は、そのことと関係があるのかもしれない。

### **記事抜粋：「クリスタル族の理想的伴侶は…」『週刊朝日』1981年6月19日号**

「選ばれる女」から「女が男を選ぶ時代」へ——全国のお見合い組織、仲人連盟がこのほどまとめた20代女性の結婚意識調査によると、「婿一人に嫁トラック一台分」といわれた10年前に比べ、現在は適齢期の男女数が同じせいか、結婚式の直前に心を翻したり、ボーイフレンドがいるのにあちこちのお見合い組織に登録したりして、ギリギリの段階まで「もっといい男がいるはず」と粘る女性が増えている。

理想の男性像も、10年前が「ぐいぐいリードしてくれる男性的な人」だったのに、いまは「なんとなく男性的で、ほどほどのガンバリ屋で、適当にハンサム。スタイルもまあまあで、ファッションにも少しは気を使って、ある程度包容力があって……、そう、私にだけやさしくしてくれればいい」と、すべてにわたって60点ぐらいずつ備わっている“中庸”な人。

年齢は1, 2歳上がいちばんよく、6歳以上離れると話が全然合わないし、10歳以上は「オジクさくて対象外」。もちろん、親との同居は絶対ダメ。意外なのは、夫の転勤を望む女性が多いこと。なぜなら、「転勤の多い男性ほど出世する」から。

10年前と変わらないのは、大卒、サラリーマン、一流企業の3条件。月給の希望額は21万円以上だが、共稼ぎをいやがる女性は少ない。上級公務員、医者、弁護士、会計士、一級建築士なら望むところ。身長も非常に気になるところでして、最低でも170センチ。165センチ以下は「問題外」と、冷たい。ちなみに10年前の最低基準は168センチ。

この2センチの差にこめられているのは、10年間の女性の体格の向上だろうか、それとも地位の……。

### **記事抜粋：「“結婚不感症”女性がいま5割も！」『ヤングレディ』1982年4月13日号**

白いウェディングドレスにキラキラ輝くプラチナの結婚指輪——それは、女性にとって幼いころからの夢。女であるかぎり、いつも結婚にあこがれてきた。

それは、“自立する女”“翔んでる女”がもてはやされ、華やかにスポットライトを浴びたころでも、大多数の女性にとっては変らないことだった。女性にとっての幸福は、やはり結婚と、多くの人は答えてきた——。

ところが、いま新しいタイプの女性たちがふえてきている。結婚に対する考え方を根底からくつがえすような“新型女性”だ！その彼女たちを、いま“結婚不感症女性”と呼びたい。

彼女たちは結婚に対して、どこかさめている。しかし、結婚を拒否しているわけではない。なんとなく、女のたどりつく先は結婚と考えているわけだが、とりあえず独身でいたい。可能なかぎり自由で、気ままな独身生活をエンジョイしたい——そう考えている。また彼女たちは、いったん結婚しても、1, 2年で気軽に離婚し、自由に生きようとする。それが“結婚不感症”と呼ばれる女性群である。

〈20代前半未婚女性 100人へのアンケート〉

問：結婚に憧れますか？

答：はい…38人　いいえ…62人

問：いつごろしたいですか？

答：いますぐにでも…31人　そのうちには…64人　いつかは…5人

問：なぜ、結婚したいの？

答：好きな人がいるから…23人　幸福になりたいから…19人  
なんとなく…43人　他人もするから…10人　わからない…5人

〈20代前半既婚女性 50人へのアンケート〉　問：幸福ですか？

答：はい…18人　いいえ…26人　わからない…6人

問：離婚を考えますか？

答：はい…16人　いいえ…26人　いつかは…8人

問：結婚に絶望を感じていますか？

答：はい…22人　いいえ…21人　その他…7人

#### ■山本律子さん（23歳・OL）

「彼は28歳。もう3年間つきあっていて、会うたびに結婚しようという。彼は一流大学をでて、大手の銀行に勤めている。将来性もありそうだし、やさしいし、スタイルもまあまあだし、愛していると思うんだけど……。

もう一つ踏みこめないのね。それは、うちの母を見ているせいだと思う。彼女は21歳で結婚して、子供を2人産んで、育てて、その子のためにずうっと苦勞して、いまはやつれきってしまっている。楽しみといたら、年に1回、高校の同窓会に行くことぐらい。あとは、テレビにしがみつくとかしら。それを見ていると、あわれというか、彼女に同情しか感じない。そして私は、ぜったいそうはなりたくないと思う。

それで、彼が“結婚しよう”といっても、素直に受け入れられないの。いくら彼がやさしくって、思いやりがあっても、結婚はちがうはず。きっと私を家にとじこめておこうとするはずだし、子供ができれば外に出たくても出られなくなると思う。

でも、一生結婚しないとは思わない。いまは商社に勤めているんだけど、大事な仕事はさせてもらえなくて、お茶くみに毛がはえた程度の仕事ね。入社3年もすれば、だれでもできるはずの仕事。それに一生しがみつくなんて考えられないこと。

いつかは結婚するんだろうけど、まだままだいまの状態でいたい。まだ遊びたいのね。

彼は結婚をあせっているみたいだから、いつまでもはっきりしないと、他の女の人を捜すかもしれない。すこし心配だけど、そうなったらそうなったで、また考える」

■梨本貴美子さん（24歳・OL）

「最近、主婦になった人のいやなところばかり目につくの。独身のころは、けっこうクリスタルで、ハデハデの格好していた人が、結婚して1年もたつと、髪の毛はバサバサ、着ているものが4、5年前に流行していたものだったりして……。顔は世帯やつれして、それほどの年でもないのに、もうオバさんという感じ。

結婚していい女になった人って見たことない。唯一の例外は、百恵ちゃんぐらい。私は年をとってもいい女でいたいから、できるだけ結婚したくないと思う。30歳すぎて、もうどうしようもないと感じたら、そのとき結婚するつもり。そのころには、結婚してもしなくっても、オバさんになっているからしかたないもの。

それまでは、いま4人いるボーイフレンドたちと、適当に遊ぶつもり。独身って、けっこう可能性があって、いつも新しい出会いがあるし楽しいと思うの」

■岡崎和枝（23歳・OL）

「私には、短大時代に婚約したフィアンセがいるんだけど、もう3年間も、1日のばしに結婚をのばしているの。彼はマスコミ関係の仕事で、毎日深夜まで働いている。仕事ひと筋という感じ。それを見ていると、頼もしいと思うんだけど、半面こわいのね。もし奥さんになったら、毎晩一人で彼の帰りを待っていなければならぬ。土・日曜だって、ほとんど仕事。そんな彼につきあわされたら、楽しい生活が待っているはずないと思うの。それより、1週間に1回か2回会っている現在のほうが幸福なはず。彼が仕事のときは、ディスコに行ったり、お酒を飲みに行ったり適当に遊べるし……。自由って大事だと思うの。

それに、経済的なこともある。いま私は自宅から通ってて、月収は約12万円。それに、両親からときどき小づかいももらっている。その大部分が自分のために使えるの。年に1回か2回は旅行もできる……。ところが、彼と結婚したら、そんな生活はぜったいできない。彼の月収は手取り約27万円。その中から新居の部屋代を出し、彼の小づかいを出し、生活したら、いくら残るかしら？ いまのほうが、どう考えてもいいに決まっている」

■小野あけみさん（21歳・学生）

「いつかは結婚すると思うんだけど、いまは結婚を考えるとゾーッとする。毎日毎日、同じ男の顔しか見られなくなるなんて、考えられないことだもの。それより変化に富んだ生活がしたいの。そして、いつまでも結婚に夢をもっていたいのね。

一人の男と深くつきあうと、たいてい、いやな面を見せつけられる。オナラをすとか、洋服を脱ぎっぱなしとか、鼻をかんだティッシュをそのへんに散らかしっぱなしとか……。そんな男の姿って、ゲンメツなの。そんな男と一生つきあわされるなんて、ぜったいイヤ！

私って、それほどバカじゃないから、どんな男でも大なり小なりいやな面があることは知っている。だからこそ、一人の男だけじゃなく多くの男性たちの、そのカッコいいところばかり見ていきたいの。こんな考え、いつまでつづくかしら」



**記事抜粋：「なぜ彼女たちは“結婚できない女”か」『週刊女性』1984年2月14日号**

●満点の男性などいない（『アルトマン』ワイヤー知恵子さん・談）

「最近の女性は、何から何まで既製品でできあがった条件の男性を望むケースが多いですね。身長は170センチ以上でサラリーマンで大卒で、趣味はスポーツの男性がいいとか…。

結婚できないタイプの女性というのは、自分なりの価値観を持っていないから、世間一般の基準に従おうとするんです。だから、新調は170センチ以上でないといけないとか、世間サイズで相手に条件をつける。自分なりの価値観を持っていれば160でも150センチだっていいはずなんですけどね。

結婚生活というのは、できあがっているわけではなくて、一緒になった2人がこれからつくっていくものなんですから、昔のように“手鍋さげても”2人で力を合わせて家庭をつくっていくという気持ちがとても大切なことなんです。

何もかも基盤の整っているところに自分が乗っかろうという考え方はイージーだし、そういう世間並みの基準を全部満足させようと思っても、そんな男性がいるわけないんです。包装紙がきれいなら中身はなくてもいいというなら別ですけど」

●経済的条件重視の傾向（『都結婚相談所』小西勲さん・談）

「男性の場合、フィーリングさえ合えば、ほかの条件が多少合わなくてもすんなり妥協するのですが、それに比べると、女性はフィーリングよりは条件のほうを重視する傾向があります。とくに最近では、社会的にも自立して働いている女性が多いので、結婚してから相手の収入だけで生活するとレベルダウンになることを嫌いがちです。何人もの相手と見合をすればするほど目が肥えて比較対象が多くなって、その中から一人だけを選ばなくなってしまいうんです。完璧を望む人は結婚しにくいということははっきりといえると思います」

**記事抜粋：「女がアタックする時代」にまん延する…」『週刊朝日』1984年3月9日号**

昨年来、結婚願望を切々と書いた本を出版し、いまや元祖的存在であるコピーライターのエッセイ作家林真理子さんによると、現代女性の「結婚したい症候群」は、山口百恵と桜田淳子の生き方を比べて、どっちがトクかを考えれば、すぐ答えの出てくるものなんだという。

「百恵ちゃんは絶好調のときにパッと歌手をやめて結婚し、女の理想像みたいにたてまつられているでしょう。桜田淳子は一人でがんばっているのに、紅白に落ちたとかブリッ子の元祖だとかいわれてバカにされるだけ。百恵ちゃんのように結婚したほうがずっとトクだって、若い女性はみんな思っているんですよ」

女の自立を唱えてがんばった人たちがいたが、結局は男にからかわれただけに終わり、がんばる女は美しくない、という美意識がまん延しているのが現状だというのだ。

（中略）

武庫川女子大の島久洋教授（社会心理学）の解釈によれば、

「エリート志向というのは、今の若い女の子のブランド志向を反映している」という。

エリートは優秀な企業、社員であるほど忙しく、めぐりあいのチャンスは少ない。そこで、積極果敢なアタック作戦が必要になる。(中略)

「今は女性が堂々と結婚願望を表に出せる時代だ」と、島教授は言う。すでに女性が積極的に“襲う”時代の兆候はいくつも表れている。

(中略)

結婚相談所にも、静かだが、着実な変化が押し寄せている。

京都女子大の小田義彦教授(心理学)が開いている日本結婚問題研究所では、コンピューターによるお見合いをやっている。入力するためのデータとして、結婚相手に希望する男性の学歴、年齢、職業を書き込ませているが、年収の項目には、年齢、職業にピッタリと合う額を書き入れてくるのには驚くという。彼女たちの情報収集力は、かなり高度である。

要求もシビアだ。身長 170~175 センチ希望の女性に、167 センチの男性を紹介したら、なぜ 3 センチ低いのか、とカミつかれた。星座、血液型による相性を考慮に入れるのも、現代女性の特徴だ。

見合いの場でも、女性が主導権をとる。1 時間ほど話をしてから京都の寺や庭に 2 人で散歩に出るときも、「サア、行きましょう」と手をとるのは、女性である。

「この 10 年間で、女性はますます積極的になりました。見合いの相手を選んで、諾否の返事もらうのに昔は男性の返事を待ってから女性の返事がくるという具合で、なかなか返事がこなかったんですが、いまは女性の側の返事が早い。反応が早くなりましたね」と小田教授はいう。

(中略)

かつては恥じらいをもって結婚にのぞんだ女性が、ホンネと積極性をむき出しにしてきた背景について、小田教授は、「女の自立」が影響しているとみる。

「ひところ、翔んでる女といわれ結婚しないことが新しい女という時代があったが、翔べずにバタついて、失速した女もいた。自立したいと思っても、キャリアウーマンにもなれない。そんなところから結婚への回帰が出てきたが、それは昔のような待つ姿勢には戻らず、積極的に働きかける女性になったんです。結婚も翔ぶのと同じ感覚でやってるわけですね」

神戸女学院大学の小関三平教授(社会学)も、

「いまの結婚願望は、フェミニストが批判するような良妻賢母になるとか、男にしがみついていこうという“先祖返り”ではない。結婚かキャリアウーマンかを対立させるのではなく、両立させてあたりまえという感覚です。結婚しても夫に尽くして家を守るという意識はないし、夫と対等と思っているから、これからの亭主族は大変だと思う」と警告する。

【1985 - 1989】(昭和 60 - 64/平成元年)

## 結婚相手の条件は“3高” 30代男性の結婚難と女性の晩婚化

- ◆「非婚時代」という言葉が話題に……結婚が“選択の時代”に入る
- ◆結婚適齢期の男女人口のアンバランスで、30代男性の結婚難…女性が男性を選ぶ時代
- ◆結婚相手の条件が、いわゆる“3高”に象徴される
  - 独身OLの理想の結婚相手は、大卒28歳、年収420万円、身長175センチ以上
- ◆“結婚適齢期”がゆらぎ、晩婚化へ＝結婚を起点とする人生設計モデルの消失
- ◆25、6歳は花のシングル、27～30歳はキャリア派への別れ道、33～35歳は結婚難(?)

### 記事抜粋：「非婚時代」『週刊女性』1987年4月28日号

非婚時代という言葉が、今話題になっている。

非婚——結婚してただ家庭に入るのでもなく、家庭か仕事かの二者択一から、ただ反結婚に走るのでもない。女性が自分らしく意欲的に生きるために選んだ、さまざまな生活様式が、通常の結婚に非ざる、非婚という形をとってしまうのだ。

今、そんな非婚を選ぶ女性たちが、とても増えているという。だから、非婚時代。

非婚の最もわかりやすい形はシングル・ライフだが、シングルの女性は、実際には、どれくらい増えているのか。

国勢調査の結果でみると、25～39歳の結婚していない女性は、昭和50年に12%だったのが、55年には12.6%、60年には14.6%と上昇している。つまり、近年になって急カーブで、シングルが増えているのだ。

自分自身がシングルで『非婚時代』(三省堂刊)という本をまとめた、フリーライターの吉廣紀代子さんは近年のこんな現象をこう説明する。

「小学校のときから男女共学で教育を受けた女たちは学校を卒業後、就職して経済的に自立する。そして自分で見聞きし、考え、行動しながら“結婚イコール女の幸せ”という、これまでの社会通念に疑問を抱く人が増え、それぞれ自分に適した生き方を模索しはじめてきました。その結果、シングル・ライフを選択する人が増えてきたわけです」

ひと口にシングルといっても、いろんなパターンがある。老齢でパートナーを亡くした後のシングル。離婚のシングル。縁がないまま、結果的にシングルできた人。また、結婚はしているが、夫の単身赴任などで一時的にシングルになった人もいる。そして、キャリア・ウーマンや目的を持つ女性に増えている、自発的なシングル。

さらに、非婚はシングルだけではない。結婚しても入籍しないカップル。入籍はしているが、互いの自由を尊重して別居しているカップル……。

今、女性たちは、通常の結婚とは違うさまざまな非婚のパターンを選択しながら、新しい女性の生き方を模索しているのだ。

(中略)

結婚は今や“選択の時代”になったのだ。結婚するかシングルでいるかの選択はもちろん“結婚生活”のあり方も自分に合った形態を選択する時代。もちろん、そんな“非婚”を実践するためには、女性が経済的にも、精神的にも自立していることが前提になるだろう。

非婚の長所としては、心の自由、自分の時間の活用、仕事に打ち込める——ことなどをあげることができる。

逆に短所としては、異性とのスキンシップが欠如しやすいことや、子供を生みにくいこと、病気のときに困ること、孤独——などがある。

非婚女性にとって、愛情とセックスでの対等なパートナーを見つけるのはむずかしく子供を生んでも、働きながら1人で育てるのは困難が多いようだ。

そして、非婚の実践者たちが、みんな不安に思っているのは老後のこと。しかし、今後ますます高齢化が進んでいく社会の中で“ひとり暮らし”の老人はもっと一般的になり、その生活ももっと明るいものになるに違いない。

1度しかない人生を有意義に生きるために、あなたも自分の生き方を見つめ直してみよう。

#### **記事抜粋：「深刻になってきた30代男性の結婚難」『週刊時事』1987年7月18日号**

「確かに男性の学歴は、相手の女性にとって、容姿や性格以上に重要な基準となっています。高卒の場合、お見合いすらできないのが現状です」

と語るのは「日本仲人連盟」の土橋凌さん。以前なら、学歴は就職に影響はあっても、結婚にはさほど影響がなかった。それほど女性を含めて大学進学率が高まったことの一つの表れと言っているのではないだろうか。そこへ大卒を含めた30代男性が結婚難時代になったため、学歴の高くない人たちがその波をもろに受けているというのが実情だ。

民間の結婚紹介機関「アルトマン・システム」の田中滋さんも、  
「最近の女性が求める結婚条件は、大卒、身長170センチ以上、安定した収入の3つです。  
女性はこの3つの中でも学歴にとくに目がいくようです」

と言う。大卒でも有名大学とそうでない大学では全然違う。ある結婚紹介所によると、  
「国立や私立でも、名門の大学出身ですと、他の条件にはある程度目をつぶって、一応は付き合ってみるというケースが多いですね。二流の大学ですと、容姿や収入など他の条件が厳しくなるようです」

これほど女性が学歴にこだわるというのは驚きだ。（中略）

昭和60年の国勢調査によると、30代前半の男性のうち、28%が未婚者だ。30歳の男性に限ると40%が未婚である。

「アルトマン・システム」の調査によれば、30歳までに結婚するのを希望している男性は85%いるという。にもかかわらずこれだけの未婚者がいるということは、30代男性の結婚難がかなり深刻になっているということだろう。

その原因は、まず何といても結婚適齢期にあたる男女の人口数のアンバランスが挙げられる。20歳から35歳までの独身者比較は、男性が755万人に対し、女性は491万人で男性が250万人以上も多い。この男性過剰時代が現出したのは、第一次、第二次のベビーブームの谷間に生まれた女性が、結婚適齢期にあたっているためだ。特に25～29歳の女性は、ここ10年間で178万人も少なくなっている。（中略）

結婚する人の数も年々減ってきている。昭和40年には約103万件だったが、57年に約78万件に、そして61年には約72万件となっている。

この男性過剰は結婚相談所の入会者の数字にもはっきりと表れている。（中略）

「ここ10年間ずっと2、3割がた男性の方が多という状況です。30歳から35歳の男性に限りますと、男性10人に対して女性4人の割合です」（田中氏）

（中略）

女性の高学歴化、社会進出にともなう晩婚化を数字で見ると——。25歳から29歳までの未婚率は、昭和35年には22%だったものが、55年に24%になり、60年には30%になっている。

また、「アルトマン・システム」が行ったアンケートによると、「結婚しなくてもいい」と答えた女性がその中の15%を占め、男性の6%を二倍以上にも上った。以前まで結婚願望が強いのは女性だったのに、完全に逆転してしまったようだ。（中略）

独身生活を楽しんでいる女性にとって、結婚して家庭生活にしばられるのが耐えられないというのはよく分かる。いずれは結婚するにしても、なるべく長い間独身生活をと考えているのだろう。これでは結婚を焦る30代男性はたまらない。

しかし、結婚に関しては女性は良いことばかり、というわけではないらしい。『『非婚時代』の著者] 吉廣さんは、

「まだまだ日本では女性の結婚には年齢規範が強く、中高年で結婚が難しい状況にあります。以前イギリスで、現在の日本のように、男女の人口比のアンバランスがあった時には、年上女房が増えるという現象がありましたが、日本ではそうならず、年齢規範のために女性がシングル化しているということもあと思います」

と言い、男性は女性に比べて社会的に結婚できる可能性、つまり“適齢期”が長く続くから幸せだ、というのだ。

このような意見に対してアルトマン・システムの田中さんは、

「女性の年齢規範は今後なくなるでしょう。これほど男性が余っているわけですから、30過ぎて独身なんていう男性は、もう女性の年齢を気にしてられない」

（中略）

男性過剰の傾向は今後も続き、昭和72年まで男性にとって厳しい結婚環境は続く。

**記事抜粋：『週刊東洋経済』1988年2月6日号、『BIGMAN』1988年5月号**

※住友銀行が1988年1月に実施した「独身サラリーマン・OLの生活意識調査と結婚観アンケート調査」によれば、

「OLは26.0歳のときに、大学卒（54.8%）で28.8歳、身長174.5センチ、年収422万8000円の男性と結婚することを希望しています。また、年収1000万円以上を希望するOLが0.3%います。結婚してからの、親との同居意向については“別居したい”とする回答が多く、OLで65.0%となっています」

また結婚しても「共稼ぎをしたい」（18.0%）、「できれば共稼ぎしたい」（34.7%）というOLの共稼ぎ願望派は半数以上になっている。男性の場合、24%が共稼ぎを希望。男女ともその理由として経済的に豊かな生活がおくれるためとしている。

男性が結婚したい年齢：28.4歳	相手の希望年齢：24.5歳	身長：158cm程度
女性が結婚したい年齢：26.0歳	相手の希望年齢：28.8歳	身長：174.5cm

ただし、この調査は希望の平均値。現実には結婚を希望している女性の条件は、(株)アルトマンの「結婚白書」（昭和63年版）によると

「4～5歳年上で、自分より16～20センチ身長の高い、ふつうの体型の健康な男性。大学卒で技術系のサラリーマンか公務員。年収350万円以上」となっている。

**「20代は独身でいたい」けど「生涯独身はイヤ」…『Hanako』1988年6月9日号**

ある結婚式の二次会での話。30歳の花嫁に向けて「なぜ、この夫を選んだのか？」の質問が飛ぶ。選択肢は3つ、①あきらめ、②妥協、③ハズミ。もちろん宴会を盛り上げるためのギャグだが、そのパーティには花嫁がOL時代につきあっていた男性が2人来ていて、しきりに花嫁をからかっている。

花婿は、卒業後に入社した商社の先輩。2人の間に燃えるような恋愛時代があったという話は聞かない。恋愛は恋愛であって、結婚とはまた別のもの、らしい。

〈20代未婚女性ではシングルライフ支持派が76%〉。20歳以上の男女3400人を対象に毎日新聞社が日本大学などと協力して実施した「家族」に関する全国世論調査で、こんなデータが出た。どうやら20代の女性は気ままなシングルライフがいちばん快適らしい。

職業別では、サラリーマン、OL、自由業などの約6割が支持派。OLや自由業といえど都市に集中しているわけで、大都市には24時間オープンコンビニエンスストアや外食産業があふれている。たしかに深夜のデニーズのカウンター席で、本を片手にコーヒーを飲んでいる若い女性がいてもちっとも違和感がないし、わびしかったり、寂しかったりするわけでもない。へたに声をかけてくる人がいたりしたらかえってうっとうしかったりする

る。シングルにとって、都市は心休まるオアシスだし、そこでは自分だけの時間が何よりも大切だ。

厚生省の調査によると、昭和 61 年の平均初婚年齢は 10 年前に比べて、男性 1.1 歳、女性が 0.7 歳伸びているそうで、先の毎日新聞の調査結果からいっても、女性の晩婚化はさらに進みそうなのだ。

しかし、欧米型のシングルと違ってあくまで晩婚であって、一生独身でいようと思っ  
ている人は非常に少ない。今回の調査でも、「生涯独身でいたい」と答えた人は、30 代を  
含めて男女それぞれ 1%にすぎない。シングルライフを楽しみそのあとで結婚する“ML  
(晩婚=married late in life) 族”が日本型のシングル志向という図式が見えてくる。

もちろんシングルライフの楽しみのひとつには、恋愛がある。楽しみとってしまっ  
てはバチが当たるほど、今、恋愛はひそかなブームを呼んでいる。村上春樹の純愛小説『ノ  
ルウェイの森』がバイブルというシングル族もいるくらいだ。

恋についてはマジメなシングルガールたちも、結婚で男性に求めるのは、収入が一番。  
20 代では恋に燃え、愛に傷つき、30 歳を過ぎたあたりで結婚について考える、それもき  
わめてドライに。結婚は恋愛の延長ならず。

それじゃあいったい、結婚もしているけど恋愛時代も続いているわ、という DINKS は  
どうなるんだろうか。潜在的なシングルライフ願望がそんな形をとらせているのかもしれ  
ないね。

### 記事抜粋：「22 歳、25 歳、28 歳…女が結婚に迷う時」『SAY』1988 年 7 月号

『結婚の決断法』の著者である高橋千枝子さん（アルトマン・パーソナルカウンセラー）  
は結婚相手に迷いを感じる女性の心理について次のように説明しています。

「結婚に迷う理由はさまざまです。昔に比べ、男性と知り合うチャンスが多く相手を自由  
に選べること、結婚に関する情報が豊富で最高の相手を幅広く捜せそうなこと、などで目  
移りして迷うのでしょう」

「初婚年齢が上がった背景に、女性の考え方の変化があげられるでしょう。“結婚しても仕  
事を”という女性が増えたことや“結婚が人生のすべて”と考える人が少なくなったこと  
がそのいい例です」

「それともうひとつ、最近の傾向として両親の元で何不自由ない暮らしをしている人が多  
いでしょ。すると、いまの環境よりいい結婚でないと“結婚を決断する”という気が起き  
ないわけです。こうなると、結婚相手となる若い男性では条件が難しい。結婚はしたいけ  
れど、できないという多くの女性がこのジレンマに陥っているのです」

女性が自分の生き方を選べる時代、結婚を選んでもシングルライフを選んでも自由とい  
う時代です。にもかかわらず、20 代で結婚する女性が圧倒的多数を占める、というのはど

うしたわけでしょうか。いくら社会が進んでも、女にとっての20代という10年間は、やはり特別な意味を持つということなのでしょう。これについて高橋さんは、

「一般的な傾向として、女性は20代のうちで、結婚を考える時期が3度あるようです。第1期は22, 23歳で結婚を夢見る年頃。第2期は25歳前後で、真剣に結婚を考える年頃です。この頃は、本人の結婚願望が強まるだけでなく、お見合いの話があったり、思わぬ人からプロポーズを受けたり、忙しい時期です。そして、第3期が28, 29歳・30歳の声を聞く直前になって、出産、育児のことを考えた結婚願望の波が押し寄せてきます」

### **記事抜粋：「女性がこだわる独身男性の細目条件」『婦人公論』1989年12月号**

(結婚情報会社アカデミックユニ・チャーム小山雅子部長・談)

①25, 6歳。シングルの華と知って強気。いわゆる3高(高学歴、高収入、高身長)を要求するのも彼女ら ②27~30歳。「仕事はここで限界」派とキャリア派のわかれ目。後者はひと握り。女の華が散っていく、周囲が結婚していく淋しさに襲われる ③33~35歳。キャリアは積んだが、このまま老いていくのは虚しい。が、キャリアを崩してまでの結婚には踏み切れない。出産できないかもしれない淋しさに襲われる。なお31, 2歳の層は、②と③にふりわけられる。

「②グループが結婚を一番真剣に考えています。一番大人なのも彼女ら。条件を下げる時も、本当に自分のあるべき所に収まったと納得して、自分に合う所にターゲットを定める。専業主婦を望む人は精神的にも経済的にも無理なく生活できる人、仕事をつづけたい人はつづけさせてくれる人を選びます。①グループは玉の輿を狙ったり、人に自慢できる相手を狙ったりする」

そして③グループは(中略)「年齢的には結婚が一番難しい年代・40歳過ぎた男性ならいるんですが、女性のほうは同年代か年下を望みます」



## 【1990 - 1994】（平成 2 - 6）

### バブル崩壊… “3 高” 幻想が崩れるが、結婚ラッシュは起きず…

- ◆結婚したい女性が増えたといわれるが、未婚者人口は年々増加
- ◆女性の平均初婚年齢は徐々に上がり、1993 年には 26 歳の台にのる
- ◆男女とも、結婚に望むのは“パートナーシップ” …従来の夫・妻の関係／役割の否定  
⇒結婚形態の多様化（同い年結婚の増加，年上妻の増加，再婚者の増加）

#### 記事抜粋：「'90 年、女と男の結婚事情を調査したら。」『an・an』1990 年 2 月 2 日号

「結婚しない女」と「結婚できない男」の時代と言われるようになって久しい。

都市を中心に、晩婚化が進む。婚姻率そのものが低下していく中で、結婚のあり方、結婚に求められるものも、大きく変わりつつある。しかし、果たして単純にみんな結婚しなくなっているのか、というと、必ずしもそうではないようだ。（中略）

リクルートが昨年秋に実施した『ワーキングウーマンに関する調査』でも、“ぜひ結婚したい” が前年の 35.5%から 44.1%へと 10%近く急増している。

もちろんこれが“結婚”熱の社会的な高まりを暗示するものなのか、それとも一時的な現象に過ぎないのかは、今後数年の動きを待たねばわからない。しかし、秋には久々のロイヤルウェディングをひかえ、興味深い傾向と言えるだろう。

#### 記事抜粋：「結婚は 30 歳、結婚したら専業主婦がいいなあ」『ACROSS』1991 年 3 月号

##### 〈第一勧業銀行「独身 OL の結婚観」〉

結婚年齢の高齢化が進む中、30 歳が結婚希望年齢のトップというアンケート結果が発表された。第一勧業銀行が東京都に住む 20 代 OL にアンケートした結果、20 代前半の結婚希望年齢は 25 歳 (25.4%) がトップだが、30 歳という人も意外と多く、20 代後半では圧倒的に 30 歳 (35.8%) を希望している。本人の希望ばかりでなく両親の望む結婚年齢も、25 歳 (20 代前半=36.4%、後半 30.1%) と並んで、30 歳 (前半=16.8%、後半=30.6%) が支持され、両年齢がツインピークを示す。ちょっと前までは 30 歳の声を聞く前になんとか結婚させようとしたものだが、今は 30 歳でいいらしい。しかし 30 歳で結婚したいというのも、結婚前に遊んで結婚したら落ち着きたいということらしく、仕事の継続は、5 年前の同調査に比べ「結婚したらやめる」という人が全体で前回の 33.0%から 39.4%へと大幅にアップし、逆に「子供が生まれるまで勤める」との答えが減少した。仕事継続の判断基準も「生活レベルの維持や向上」が 20 代を通して高いが、20 代前半では「自分の仕事観」が 21.1%を占めるのに、後半は「夫の意見」が 20.8%と保守化が見られた。

### 記事抜粋：「データで読む「いまどきの結婚」『Voice 臨増』1991年10月1日号

1991年の「アルトマン結婚白書」によると、「結婚形態多様化時代」がやってくるという。つまり、「年齢にはこだわらない」「恋愛結婚にはこだわらない」「バツイチにはこだわらない」という3つのトレンドが、年を追うごとにはっきりしてきたというわけだ。

### 記事抜粋：「女にとって結婚とは何だろう。」『an・an』1992年6月26日号

現代の日本女性なら誰でも、何歳までに結婚しないと恥ずかしい、などとは夢にも考えない。「適齢期」はもちろん死語で、いい相手が見つかるまでは堂々と独身生活を続ける、結婚に関しての「焦り」など全く存在しない。けれど、結婚に関心がないかといえば、むしろ逆。関心は大いにある。理想の相手、理想の結婚を夢見る派は、やっぱり最多数……？それと同じくらいに、結婚恐怖症の傾向もまた多くの女性に見られる。結婚生活の現実を見聞きして、期待を持ってなくなってしまった女たちだ。

#### ■未婚女性が本当に望んでいる相手は、どんな人？

“3高”よりも大切なのは、相手の人間性。

“結婚したい男の条件”というとき、すぐに3高が取り上げられてしまうけれど、女性が本当に求めている条件は、そんな外面的なことじゃない、という意見をたくさん読者の方からいただいた。

なかでも多かったのは、「3高は見合いの条件であって、結婚の条件ではない」という意見。見合いでは、まず最初に、物質的な条件で判断するしかないから、誰でも低いより高い方がいい、と答えてしまうというわけ。

その次に多かったのが、「外面的条件がいいに越したことはないのは事実。でも結婚を決意させるのは人間性や人生観など、もっとメンタルな要素のはず」との意見。

未婚女性の多くは、恋愛を経て結婚を考えると答えている。だからこそ、物質的な条件より、まず相手がどんな心の持ち主か、ということの方がずっと大切だと考えているのです。

#### 職業のステータスの高さより、仕事への取り組み方が大切。

結婚相手の仕事について、女性たちの意見は？（中略）

実はアンケートの中で、とても多かった回答が、「職業にはこだわらない」というのも。「本人が打ち込める仕事だったら何でもいいと思う」（メーカーOL・25歳）、「結婚は気持ちの問題。仕事は、結果でしかない」（コピーライター・27歳）、「基本的にはエリートでもフリーターでも構わない、イヤなのは、仕事もビジョンもなくただこなしているだけの人。そんな人が夫だったら情けないです」（流通OL・29歳）などなど、相手の職種より、その人がどんなふうに取り組んでいるかが、結婚相手に求める条件になってきた。

**自分を向上させてくれる、“知性”を持つ人が理想。**

結婚したら長く生活を共にしていく相手だから、やっぱり性格や資質が、一番重要な条件。今、女性はどんなことを相手の男性に求めているのだろうか。

トップは、頭の良さ（知性）。何らかの形で、自分の知的好奇心を刺激してくれる人を第一条件に望んでいる人がとても多かった。その次に多かったのが包容力、そして優しさ。4位に入ったのが、上位20位中ただ一つの物質的な要素、経済力。（以下、5位「共通の趣味」、6位「たくましさ」、7位「共通の価値観」、8位「気のおけない人」、9位「思いやり」）

**育った環境が似ている人がいい、そんな保守的な意見も増加。**

結婚相手に求めるメンタルな条件の中で、意外に多かったのが、「育った環境が似ている人」という回答。

「自分の価値観に近い人がいいから」「サラリーマンの娘に育ったから、サラリーマン家庭以外のことはわからない」といった保守的な意見が増えている。結婚後の人生が想像つかないのは不安だし、いままでと同じような生活を続けていければ、とりあえずいまのレベルの幸せは確保できるはず、という考え方がまず一つ。

また、「相手も自分と同じような環境に育っていれば、相手の家族ともうまくやっていけそう」（損保 OL・26歳）という、超現実的考え方も。本人同士の気持ちだけでなく、双方の家族の存在が大きく結婚を左右する、昔ながらの“家”と“家”の結婚という考え方も、単に古くさいと片付けられているわけではないようだ。

**記事抜粋：「やっぱり結婚したい症候群」の女たち。『自由時間』1992年8月20日号**

最近の女子大生のあいだでは、結婚願望が強まっているという。日本女子大学講師で『さよなら Hanako 族』の著者でもある山下悦子さんによると、

「髪を振り乱して働くキャリアウーマンになるのはイヤ。でも、醜いオバタリアンにもなりたくない。私的な生活を充実させることが、いちばん大事だと考えているんです」とのこと。

つまり、自分らしく生きられるのであれば、専業主婦でもかまわないというのだ。女の自立が声高に叫ばれた80年代にくらべると、なんという変わりようだろう。しかし、保守返りというわけでもないらしい。彼女たちが、これまでの主婦像に対して否定的にみているからだ。

「会社人間で家庭をかえりみない父と、子供の受験だけが関心事で、女としての魅力が感じられない母。しかも、夫婦の会話らしきものはまったくなし。そんな夫婦に憧れますか？ 両親をみていれば、結婚なんかしなくてもいいと考えるのは当然でしょう」

そんな背景から誕生したのが、谷村志穂のベストセラー『結婚しないかもしれない症候群』だった。経済的に自立した女はたしかにかっこよくみえた。ところが、バブルの崩壊がキャリアウーマン幻想をも打ち破ってしまう。ノルマを達成するために、顧客に無断で株の売買を行った証券レディもいた。ストレスはおろか、犯罪まで男並みというわけだ。「オヤジギャルというのは、男のコピーですよ。いまや男だって過労死するまで働いても、うさぎ小屋さえ手に入るかどうか。個人的な幸福を捨ててまで、男並に働こうなんて考えられません」

そうなれば、輝いて見えるのは主婦の座だ。結婚したら、子供は 2, 3 人、夫の協力を得ながら、仕事は無理のない範囲で続けていく。女としても人間としても魅力的な主婦が、近ごろの女子大生の理想像なのだそうだ。

「以前、主婦の幸福は奴隷の幸福だと言い捨てたフェミニストがいました。でも Hanako 族に代表されるいまの女性は、差別ってなに、と聞いてくるほど抑圧から解放されています。だいいち家庭というのはパートナーとふたりで作っていくもの。男社会の発想で家庭を作るつもりはまったくありません」

山下さん自身、ふたりの子供を育てながら研究を続け、論文が認められたことで母校の講師として迎えられた人。専業主婦であっても、しっかりと自分の世界を持ち続けられることを自ら証明したようなものだ。むしろ、自由にマネジメントできる家庭のなかにこそ、自分らしい生き方への近道があるのかもしれない。

アルトマン広報室の内藤智子さんも、最近の理想の結婚形態として「パートナーシップ結婚」をあげている。

「お互いの考え方、仕事を尊重し、お互いに刺激を与え合うパートナーとしての関係ですね。いわゆる、妻、夫の関係は望んでいません。男女ともに、もっとも希望が多いのが、このパートナーシップ結婚。団塊の世代に流行した友達夫婦から、一歩進んだ関係ですね」

いずれにしても、問題になるのは、夫となるべき男の側の心構えだろう。

「女性が解放されてしまったいま、自由にならなくてはいけないのは男性のほうですよ」と、山下さんはいうのだが――。

### **記事抜粋：「『ダサくてまじめな男』がモテだした理由」『DIME』1992年9月17日号**

#### **「3高神話は作られたもの」という結婚情報業界の常識**

(略) 結婚情報サービス『200%クラブ』(アカデミックユニ・チャーム株)のメンバーサービス部部长・小山雅子氏は語る。

「結婚難といわれて久しいのですが、最初にいわれた頃は、量的な結婚難——男女のペアリングをしてゆくと男性が余るという状況が盛んに語られましたよね。で、次に、“女性の高望み=3高”という図式が、結婚難の原因といわれました。ところが、“3高”とは何かよく考えてみると、昔からいわれているモテる男性の条件にすぎないんですよ。では

なぜ『3高、3高』と叫ばれだしたのか。それは、結婚情報産業がデータを重視するようになったとき、“どういう人がいいですか？”というアンケートの結果を語る上で、“3高”が、数字的にあらわしやすかったというだけのこと。つまり、たとえば背は170センチ以上、大学卒以上、年収〇〇万円以上という“3高”をしめす具体的な数字が存在したことが、信憑性があるように語られた原因なんですよ」

“結婚相手の条件=3高”という話は、誰もが思い描く理想形にすぎなかった。もちろん男性も女性もそんなことはわかり切っていたはずなのだが、数字というデータが存在することで、誰もが“そうでなくてはならない”という足枷が架けられたのである。

そして、その3高の呪縛からいち早く抜け出したのは女性の側だった。小山氏は続ける。「いまだに、非常に3高にこだわる女性がいるのは事実です。しかし、それは少数派。女性たちの個人を取り出して聞いてみると、相手に望むのは、3高的な表面に現われる条件ではなく、自分にとって精神的な支えになる人である、とか、自分が生きていく上でプラスになるパートナーなのか、といった目に見えない条件なんですよ」

### 『部屋とYシャツと私』現象と“分相応な結婚”

3高男やヤンエグを恋愛対象とすることが、ムーブメントとして成立していたことは確かである。しかし、その男性像は、「あくまで理想像であったということが、女性たちの中ではっきりし始めたのかもしれない。もちろん相手の条件のなかに“容姿”や“収入”が含まれることは悪くはないだろう。ただあまりにも“容姿”や“収入”にこだわっていたことや、それだけで、恋愛や結婚の相手を決めようとしていたことが、否定されているのだ。

平松愛理の歌う『部屋とYシャツと私』は、ラジオドラマ化され、コミックにもなって好評を博している。(中略) お金や容姿よりも“部屋とYシャツ”と、“信頼できる相手”がいれば十分だという、分相応な結婚観が現われ始めたのである。

### 記事抜粋：「三高が崩れて女性がお相手に望む最低条件」『VIEWS』1994年3月23日号

「そうよね～。不況だと働いてもうまみがなくなっちゃうのよね。ボーナスとかも減ってくるし……。前は働いていること自体が楽しかったけど、今は会社にも、営業マンの男の人たちにも熱意がなくて、つまんないもん。だからあ、家庭でのんびりしたいっていうか……。あたしもこの不況にはつかれてるのよね」

こう言うのは、経営コンサルタント会社に勤務する29歳の女性。バリバリのキャリアを持つ彼女が、こんな発言をするのを聞いてもわかるように、このところの不況で、女性の結婚願望の高まりはかなりのものがある。

リクルートが手がける、結婚情報誌『ゼクシィ』の芳原世幸編集長の話聞いてみよう。

「若い世代はこの2年、企業の採用が減ってきているし、上の世代の総合職の失敗をみていますからねえ。一方で、29～30の女性たちは、管理職ですら降格になったりする不況の中で、このまま行っても自分のポストがないってことがわかっている。そこで、今までは“理想の相手がないなら、結婚しなくてもいいじゃない”と考えていたのに、結婚に視点が行くようになったということですね」

女のコがこういう風に妥協して行けば、“結婚しないかも現象”の反動で凄いい結婚ラッシュになるはず！と誰しもが考えるだろう。

そういえば、例のロイヤル・ウエディングの後で、マスコミも「かけ込み結婚が急増する」だの「女の値段が下がる！」だの、いろいろ騒ぎたてたモノだ。

ところが……。なぜか、未だに現実には結婚のビッグウェーブがやってきたという話は聞こえてこない。どうして???

「結婚願望？あるある！やっぱり、養って、守ってもらいたいし……」（31歳・広告代理店）

「（結婚）考えている人は多いですよ。短大のお友達と会うと、“生活変えたいよね～。結婚かな～”ってね」（26歳・メーカー勤務）

誰に聞いても、女の側の熱意の高まりは間違いない。

一時は団塊ジュニアの女性が先に適齢期に入るという理由で、男女比逆転と騒いだ時期もあったが、しかし、現実問題としての慢性的な男あまりの状況はそのままだ。

バブル崩壊で「三高」だの「年収1千万円」だのと浮かれていた女性が現実的になり、手近な男とバンバン結婚を決めるという筋書きはできあがっているのに…。なぜ…？

（中略）

要するに、以前は自分もまだまだ働くつもりだったものが、不況の結果、完全に相手の収入だけで……と変化したことが原因らしい。

「三高は崩れたというけれど、女性の理想はそんなに変わってないですよ。特に高収入という点は……」と前出『ゼクシィ』の芳原さんも指摘するように、「もう三高じゃない」という女性の、妥協している部分は背丈や学歴で、収入の項目ではない。

たとえば、前出の26歳メーカーOLの彼女も、不況で人を見る目が変わったし、現実的になったが、話が現実の結婚生活に及ぶと「パートにでるのもイヤだし、今よりお小遣いが減るの絶対イヤ」と答えた。ちなみに自宅にいる彼女は、給料全額をお小遣いとして使っている。不況で残業もボーナスも吹き飛んだ男の側としては、年収1千万というのはかなり法外なレベルかもしれない。

しかし、女性の話を聞いてみると別に贅沢をしたいという人はなくて、今より惨めな暮らしになることを恐れているだけだ。2部屋以上の住居で、少しは服も買いたいし、子供も欲しいし……というふうに計算していくとそのくらい必要になってしまう。

冒頭の発言をした彼女は、「この年になると、500万円の相手でいいとは言えない」けど、1千万円なんて言わない。自分は現実的だから「手取りで800万円あればやっていける」と言ってから、自分で吹き出した。

「そうかあ。でも税込みだと1千万円以上かあ……（笑）」